

第36回 全日本中学生水の作文コンクール
入賞作文集

水について考える

主催 水循環政策本部・国土交通省・都道府県
後援 文部科学省・厚生労働省・農林水産省・環境省
水の週間実行委員会・独立行政法人水資源機構
全日本中学校長会

第36回 全日本中学生水の作文コンクール について

水は人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源であり、限りある資源でもあります。

「水の日」及び「水の週間」は、水の大切さや水資源開発の重要性に対する国民の関心を高め、理解を深めるため、昭和52年の閣議了解により政府が定めたものです。年間を通じて水の使用量が多く、水についての関心が高まる時期である8月の初日を「水の日」（8月1日）とし、この日を初日とする一週間（8月1日～7日）を「水の週間」として、水に関する様々な啓発行事を毎年実施しております。

この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和54年より「水の日」・「水の週間」行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいはご家族や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

第36回を迎えた今年は、3月に水循環基本法が成立し、8月1日は法律で定められた「水の日」となりました。このことから、「全日本中学生水の作文コンクール」を政府全体の取組とするため、最優秀賞に内閣総理大臣賞を、優秀賞に厚生労働大臣賞、農林水産大臣賞、環境大臣賞を新たに創設しました。

全国（海外を含む）の中学生から19,419編（学校数331校）の応募があり、今回は自らの体験を通じ日常生活における水の貴重さを表現したもの、美しく豊かな水を未来へ受け継いでいくために水を大切にしていこうという気持ちがよく表現されたもの等がありました。このたび、入賞作文45編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校やご家庭において、「水」について考えるきっかけとしてご活用ください。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、またご多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚くお礼申し上げますとともに、ご協力いただきました文部科学省、厚生労働省、農林水産省、環境省、都道府県、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構及び全日本中学校長会等関係の方々に深く感謝申し上げます。

平成26年8月

国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部

「水の日」・「水の週間」について

「水の日」及び「水の週間」については、昭和52年5月の閣議了解を基にその行事等を実施して参りました。諸行事の実施により我が国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することを目的に、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の初日である8月1日を「水の日」、この日を初日とする一週間を「水の週間」としております。

「水の日」及び「水の週間」について

閣議了解
昭和52年5月31日

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

平成26年3月に水循環基本法が成立しました。本法律では、水が健全に循環し、そのもたらす恵沢を将来にわたり享受できるよう、水循環に関わる施策を包括的に進めていくことが不可欠であるとされました。また、同法第10条において、「水の日」が8月1日と規定され、国及び地方公共団体は水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならないとされています。

水循環基本法（平成二十六年法律第十六号）

（水の日）

第十条 国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水の日を設ける。

2 水の日は、八月一日とする。

3 国及び地方公共団体は、水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならない。

全日本中学生水の作文コンクールは、広く国民が水の重要性についての理解と関心を深めるための普及行事として、「水の日」・「水の週間」行事に位置付け実施しているものです。

目次

最優秀賞 (一編)

《内閣総理大臣賞》 棚田の米作りから考える水

静岡県 湖西市立白須賀中学校 三年 片山 裕里加 2

優秀賞 (八編)

《厚生労働大臣賞》 当たり前の生活

東京都 東京学芸大学附属国際中等教育学校 二年 岡野 奈々 3

《農林水産大臣賞》 命を育む水

沖縄県 宮古島市立北中学校 二年 大濱 愛里 4

《国土交通大臣賞》 水は命―松山大潟水に学ぶ―

愛媛県 松山市立椿中学校 三年 今村 千春 5

《環境大臣賞》 ふるさと

福島県 大熊町立大熊中学校 二年 齋藤 真緒 6

《水の週間実行委員会会長賞》 その名に恥じぬ星にするため

山梨県 山梨大学教育人間科学部附属中学校 二年 小平 守莉 7

《独立行政法人水資源機構理事長賞》 多くの犠牲によつてできたもの

東京都 東京学芸大学附属国際中等教育学校 二年 山崎 蒼空 8

《全日本中学校長会会長賞》 我が家自慢のお米の秘密

東京都 島根県 大田市立北三瓶中学校 二年 森山 愛 9

《全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞》

清い水のために

東京都 東京中華学校 二年 潘 庸晶 10

入選 (三十六編)

北海道	美唄市立美唄中学校	三年	久恒 朱結	11
青森県	青森県立三本木高等学校附属中学校	一年	梅田 千恵梨	12
岩手県	盛岡市立飯岡中学校	二年	五代儀 光夏	13
岩手県	盛岡市立飯岡中学校	三年	熊谷 希	14
岩手県	滝沢市立姥屋敷中学校	三年	鈴木 綾	15
宮城県	石巻市立稲井中学校	二年	勝然 みなみ	16
茨城県	土浦日本大学中等教育学校	一年	加藤 涼芳	17
栃木県	佐野日本大学中等教育学校	一年	中村 華	18
栃木県	茂木町立中川中学校	三年	廣木 未唯	19
群馬県	群馬大学教育学部附属中学校	二年	長岡 京花	20
埼玉県	川越市立初雁中学校	三年	中村 日向子	21
埼玉県	秩父市立大滝中学校	二年	木村 有沙	22
埼玉県	八潮市立八條中学校	三年	早津 孝恵	23
神奈川県	洗足学園中学校	一年	仁科 満泉子	24
新潟県	上越市立柿崎中学校	三年	廣田 海斗	25
静岡県	富士宮市立富士宮第一中学校	三年	小野 綾華	26
三重県	皇學館中学校	一年	角 綾華	27
滋賀県	守山市立守山中学校	三年	澤井 成美	28

資料

第三十六回「全日本中学生水の作文コンクール」募集ポスター	47
第三十六回「全日本中学生水の作文コンクール」概要	48
第三十六回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿	49
第三十六回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況	50
第三十六回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移	51
第三十六回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰状	52

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

棚田の米作りから考える水

昨年の六月初め、県の鳥サンコウチョウが飛来する「不動谷の森」の棚田で田植えをしました。

湖西市北部の山間部には、昭和三十年代までは棚田が広がり、米づくりが行われていました。しかし、日本の高度経済成長とともに機械化が難しい棚田にはスギやヒノキが植えられ、いつしか日光が差し込まないような不健康な森となりました。

その不健康な森を再生し、健康な森にしようと、父がやっているボランティア団体が動き始めました。私も、よくそこに連れて行ってもらっていたので、荒廃した森の樹木の間伐や除伐、下草刈りの作業を手伝いました。このまま森を荒廃させてしまったのでは、森が死んでしまい、災害の原因になったり、動植物が生息できなくなったりしてしまうという危機感を持っていました。森全体からすれば、私たちの作業は一部でしかありません。しかし、作業をしているおじさんたちは、とても、生き生きとしていました。

それから四年が経ち、人が入れないくらいに荒れていた不動谷の森もすっかりきれいになりました。しかし、五十年も放置されていた棚田は、田んぼとして使えないくらいに土が荒廃していましたので、土づくりも大変な作業でした。枯れ葉を集めてたい肥にしたり、小川から水を引いてきたりしました。棚田も美しくよみがえりました。

田んぼは、米をつくるだけではなく、水をためておく大切な場所でもあります。水がたまれば、カエルやイモリ、トンボなどの水生生物が生息するようになります。それをえさにする鳥やへびなどの動物も生息するようになります。植物も日差しを浴びてよみがえってきます。日光が差し込む森は、下草が茂り、豊かな自然がよみがえります。そして、そこからわき出る水が、棚田に蓄えられ、動植物が生息する豊かな環境が整えられます。

静岡県 湖西市立白須賀中学校 三年 片山 裕里加

水があることによって、自然環境が豊かになり、心がいやされる空間となります。

「足が抜けないよ。」「泥だらけになっちゃったよ。」などと、棚田に多くの声が響き渡ります。森からわき出たり、小川から取り入れたりした豊かな水がはられた棚田に、手作業でしっかりと苗を植えていきました。泥だらけの服で休憩していると、渡り鳥で準絶滅危惧種のサンコウチョウの「ツキ、ヒ、ホシ、ホイ、ホイ、ホイ」という鳴き声が聞こえてきました。

不動谷の森が整備され、棚田ができたことによって、えさとなる昆虫が増えたから聞くことができたのかもしれない。住宅地からそれほど離れていないところに、サンコウチョウが生息できる場所があることに驚きます。これも、森づくりをして、棚田を再生したからかもしれません。これが里山の営みだと、作業をしていたおじさんが教えてくださいました。里山は、自然と人が共存しながら、自然の恵みを私たち人間がいただくことができる大変ありがたいところです。

強い日差しの照りつける暑い夏には、泥だらけになって田の草取りをしました。成長した稲の穂が顔に当たってかゆくなるのですが、田の草取りがおもしろくて夢中になって取っていました。

十月には稲を刈り、十一月には脱穀をしました。「いいにおいだ。」「これが新米か。」と言いながら、土づくりから一年掛けてできた米をおいしくいただきました。水からの恵みが、私たちの命を支えていることを実感した米づくりでした。

これからも、水があることによって、豊かな自然が守られ、私たちの命も支えられていることを多くの人に知らせていくとともに、水のありがたさを感じながら、森づくりや棚田の再生に取り組んでいきたいと思えます。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

当たり前の生活

東京都 東京学芸大学附属国際中等教育学校 二年 岡野 奈々

「ジャー。」

今日も水道からきれいな水が出る。これは、「当たり前」と思っていた。しかし、地球の裏側では、たった一口の水を求めて、多くの子ども達が何十キロも歩く。世界では約九億人の人々が、汚れた水しか飲むことができず、生活に必要な水を得るために大きな負担を強いられている。同じ地球上で、同じ時代に生まれてきたにもかかわらず、こんなにも差があるなんて理不尽すぎると思う。

実際、以前私がインドネシアへ旅行した時のことだ。泊まっていたホテルの近くに川が流れていたのだが、その川の色を見て私はとてもショックを受けた。川は、晴れている間は灰色で、雨が降ると真っ茶色になった。油も浮いていて、とても強い悪臭がした。日本では、生活用水を下水処理場できれいにしてから海や川に放流するが、インドネシアのその地域では、下水処理場が整備されていないため、生活用水をそのまま川に流しているようだ。しかし、更に私が驚いたのは、その川で遊ぶ子供や、魚を釣ったり洗濯をしている大人がいたことだ。彼らは、きれいな水源が近くになかったり、あっても容易に手に入れることができないため、そのようににごったとてもきれいとは言えない水を、そのまま生活用水として使用せざるを得ないのだ。都心部で水道があっても、蛇口から流れ出る水は常にごっており、日本のようにそのまま飲んだり、料理に使用したりすることも不可能なのだ。私は、このインドネシアでの滞在を通して、きれいな透んだ水が日常にない生活の不便さをまざまざと感じた。と同時に、日本での「当たり前」だった水事情が実はとても発展的で、膨大な設備の整備によって成し得ていたということに気づかされた。きれいで安全な水に恵まれた日常生活に感謝し、それを維持していく努力をすることが、私達の務めだと改めて認識させられた。

この旅行で、日本の水を巡る環境に興味がわき、春休みを利用して江

東区にある東京都水の科学館というところに足を運んでみた。

ここでは、水の不思議と大切さを科学の視点で学び、水と水道への興味を深めることができた。普段の私生活の中で何気なく使っている水が、実は、大自然の恵みと摂理を有効利用し、そして現代人の知恵と技術によって支えられていることを詳しく知った。そして、蛇口から出てくる水一滴のありがたみを改めて痛感した。

そこで学んだことの一つに、水道管の繋ぎ目の構造がある。耐震性を高めるために、揺さぶっても引張っても繋ぎ目が抜け落ちない工夫がなされている。実際に、この耐震性の水道管が引いてあった場所だけは、あの東日本大震災の時でも壊れなかったそうだ。

他に、事故や震災等が起きても確実に水を送ることが出来るように、長さ約十六キロメートルもある原水連絡管を二本に増やしたり、老朽化が進んでいる箇所や古いタイプの水道管を使用している地域では、順次耐震性の高いものに取り替える工事が進められているそうだ。

このように、私たちの見えないところで、こんなにたくさん地道な努力がなされていることや、世界の水不足の人々のことを考えると、たった今もコップに入った水を捨てようとした自分が、とても恥ずかしく感じられる。私一人にできることは限られているが、それを無力ととらえず、各々が水の大切さを認識し、その意識を集約させることで、より多くの水の節水ができると信じている。だから、この当たり前の恵まれた水のある生活について、慢心することのないように日々、生活していかなければならない。そのために私も、まずこの一杯の水から大切にしていきたい。

農林水産大臣賞（優秀賞）

命を育む水

沖縄県 宮古島市立北中学校 二年 大濱 愛里

飛行機から見える島には、コンクリートやかわらの屋根の家、木々、さとうきび畑が広がっています。そして、海にはサンゴ礁が見えます。山や川はありません。私の住んでいる宮古島のいつもの景色です。しかし、この島の見えない場所に、大切なものがあります。それは、「地下水」です。

普段当たり前のように、私達のくらしの中には「水」があります。その水を「大切にする」ということは、聞き慣れた言葉の、当たり前のことと、私はそれを理解しているつもりでした。しかし、宮古島の地下水の話を知って、蛇口からきれいな水が出てくることは、当たり前のことではないのだと気づかされました。

宮古島は、地形が平坦で、島を覆う石灰岩の透水性が高いため、川がありません。地表から地下へしみこむ水の割合が他の地域と比べて高く、その量を計算すると年間約一億三千万トンにも達すると言われています。このように豊富な地下水に恵まれた島ですが、降った雨水のほとんどが地中に流れてしまうため、水を得るために様々な苦労がありました。調べてみると、水道が普及する前は、雨水を各家庭でためたり、井戸水を利用して、とても大変だったことがうかがえます。その中でも、農業用水の確保は難しく、干ばつに悩まされたこともあるそうです。地下水を有効に活用するために、地下ダムが作られ、水道が整備され、島は昔よりも水に恵まれた環境となりました。水を得たことで、畑で作物を育て、生活の中でも自由に水を使うことができるようになり、安心して、安定した暮らしができるようになったのだと思います。

昨年の夏、沖縄県は雨が少なく、県内でも一番のさとうきびの生産地と言われる私たちの島でも、地下ダムの水位が下がり、農家のみなさんは大きな被害を受けました。朝や夕方に、トラックにのせたタンクから、畑まで水を運んでいたりと、スプリンクラーから勢いよくかん水している

様子を、夏の間は多く目にしました。それでも枯れてしまったものも多いと聞きます。こんなにたくさんさんの水が、さとうきびを育てるのに必要なのだと思えることができませんでした。しかし、そのニュースを知っていても、各家庭が断水になることはほとんどないので、それをどこか他人事のように感じている人も少なくはないと思います。昔よりも水に恵まれた環境にある私たちが、日々水への感謝を忘れてはならないのです。

水を守るために、どんなことができるか考えてみました。まずは、自分の生活を振り返ることだと思います。のどがかわけば水を飲みます。部活の時も、水を一杯口にするだけで、頑張ろうという気力が湧いてきます。水分を取らないと、人間をはじめ生き物は生きていくことができません。洗濯やお風呂、食器など、清潔な環境を守っているのも水のおかげです。少し振り返るだけでも、私たちの生活が、数多くの水からの恵みを受けていることが分かります。そして、その水をどのように使っているかを考えることも必要だと思います。私は、家で顔を洗うときや、学校の清掃時間など、少しの時間を面倒くさがって、必要以上に水を出したままにすることがあります。ポイ捨てをなくす、洗剤の量を減らすなど、環境を守ることが、水を守ることにつながることを忘れず、できることから努力しなければなりません。宮古島の地下水や、農業のことを調べてみて、水の大切さを改めて実感し、「当たり前に使っている水」ではなく、「水を大切にすることは当たり前」という意識に変えて、節水を心がけていきたいと強く思いました。

島の地下水は目には見えません。でも、私たちのすぐそばで命を育んでいます。小さなことでも一人一人が続けることで、水の恵みは未来へ届くのだと信じています。

国土交通大臣賞（優秀賞）

水は命 — 松山大湧水に学ぶ —

「こらっ、水出しっぱなしにしたらダメやろ！無駄にして、もったいない！」私は小さい頃、よく水を出しっ放しにしてしまい、母に見つかっては怒られた。私も、もちろんいけないことだと知ってはいたが、ついうっかりしてしまう。そもそも、なぜそんなに水を大切にしないといけないのか、あまり分かっていなかったのだ。

私が幼い頃住んでいた西条市は「水の都」と呼ばれ、おいしくて透き通った水が、あちこちに湧き出ていた。水道代も無料で、水をいくら使ってもいいような気分になっていたのだと思う。

私が怒られて不満げにしていたからであろう。母がゆっくりと諭すように語り始めた。「水なんて蛇口をひねればいつでも出てくると思っているんでしょ？あなたが生まれるずっと前のことになるけど、松山市では大湧水が起きて、水が使えなくなることがあるの。お母さんはそれを体験したから、水の大変さや大切さがよく分かるの。」大湧水？その言葉を耳にした私は、その言葉の意味を理解することはできなかったが、水は無限にあるわけではなく、使い過ぎてはいけないのだ、ということには分かった。そう言いながら私を見る母の真剣なまなざしに、私は、ただうなずくしかなかった。

あれから何年経ったころだっただろうか。私は、母の実家のある松山に引っ越して来た。松山に来て、すぐに感じたのが、松山市の節水意識の高さだった。手洗い場やトイレなどいたる所に「水を大切に」などをよびかけるポスターが貼られている。また、各家庭には「節水」と書かれたチラシが配られる。友達の家には、湧水が起きた時のためのバケツも用意されているという。なぜ、松山市はこんなに節水意識が高いのだろうと考えたとき、ふと、以前母に言われたことを思い出した。大湧水とはいったいどんなものだったのだろうか。真剣な眼差しの母の姿を思い出し、聞いてみなければとの思いに駆られ、母に尋ねてみることにし

愛媛県 松山市立椿中学校 三年 今村 千春

た。すると、「この量の水で、食器洗いをしてみて。」答える代わりに母が差し出したものは、洗面器にたった一杯の水。「食器はたくさんあるから、そんな量の水だけでは絶対に足りない、無理だ。」と思っていると、「お母さんはできるよ。」と私の心を見透かしたように母が言う。

そこで私は、できるだけ効率のいい方法を考えてから実践してみた。洗う前に油污れをあらかじめ取っておき、洗剤を使い過ぎず、すぐ水は少しずつ大切に使う。この方法を守って実践してみると、洗面器一杯の水では少し足りなかったが、普段の食器洗いの水の使用量を大幅に減らすことに成功した。

母は私の奮闘ぶりを見て、にっこり笑い、大湧水のとときの思い出を話し始めてくれた。ひどいときには、水道の蛇口から水が出る時間は四時間だけ。ポリバケツに水を溜め、その水を一日大切に使うのだ。当然、洗濯や入浴は毎日できない。我慢して我慢して、水を大切に使うのだ。たそうだ。だから、松山の人は、水のありがたさを知っているのだ。

「水がないと人は生きていけないでしょう？それなのに、人は水が無駄にしても平気であるなんておかしいと思わない？」私は母の話にとっても驚いた。水が使えるのは、当たり前のことではなく、とてもありがたいことなのだ。だから、私は、母に言われて食器洗いの方法を見直したように、身の回りの些細なことから水資源を守る取り組みをしていきたいと思うようになった。入浴中のシャワーの時間の短縮、どんなときでも水を出しっ放しにしない、私にもできることはたくさんある。

水は命。水を守ることは、命を守ること。松山の大湧水から得た教訓を忘れず、水が使えることに感謝して生活したい。そして、豊かな水資源を守り続けていきたいと思う。

環境大臣賞（優秀賞）

ふるさと

福島県 大熊町立大熊中学校 二年 齋藤 真緒

あれから三年。私は第二の古里である会津で元気に生活している中学二年生です。地域の方の優しさと温かさに見守られ、あの恐ろしかった光景は私の心から少しづつ忘れかけているように感じます。

私は、あの日までは将来のことなど何の不安も感じず、美しい水に囲まれ幸せに暮らしていました。海や川のきれいな水では、たくさんの方が泳ぎ、魚たちも躍るようにとび跳ねていました。そして、私たちが毎日口にしていく水もガラスのように透き通っていて、味もほんのりと甘く、とてもおいしく幸せでした。私はそんな大熊町の水が大好きでした。

三月十一日のあの瞬間、私たちはその水から突き放されたのです。蛇口からは水が一滴も出てきませんでした。避難先でもジュースのみで水を口にすることはありませんでした。私の前から水は消えてしまったのです。

そうになると、人間とは思議なもので水を飲みたい、という欲求がますます強くなり、今まで感じたことのない不安が私の心を支配したのです。しかし、日にちが経つにつれ、私はもう一生水を飲むことができなにかもしれないという絶望感で悲しくなり、あきらめかけた時もありました。

数日後、私たち家族は叔父の家に避難することになりました。ちょうど夕食時で、空腹だった私たち家族は、香ばしい香りにほっとしたのです。机の上にはカレーライスと水が置かれていました。私が夢にまで見た水との再会に、私は踊り上がって喜びました。私は嬉しくて、水を手にとると一気に飲み干しました。思わず、

「あー。おいしい。幸せ。」

と叫んでいたのです。もう飲めないかも、と思っていた水を存分に味わいました。その水も大熊町の水のように、ほんのり甘く柔らかで優しく、自分が生きていることを実感でき涙がこぼれてきました。

私は会津に来てから知った言葉があります。会津のように雪深い地方では、雪に対して「克雪」「親雪」「利雪」という言葉があるそうです。この言葉を水にも使えないだろうかと考えてみました。「克水」「親水」「利水」という言葉です。「克水」は、あの大暴れする海や川を堤防やダムを築いて災害に備えます。「親水」は、水を敵とみるのではなく、友達と接するように、水の言葉に耳を傾けながら、こちらからも水と仲良く付き合っていくことです。「利水」とは、すでに生活用水、農業用水、工業用水、発電用水等に利用されていて、新しい可能性が見出し出していけると考えます。

私は、あの時から水の大切さを考えるようになりました。今まであまりにも近くにあり、感謝の心を忘れていた自分をみつめ直すことができただのです。水は命と同じように尊いものです。地球を宇宙から見ると、真つ青です。地球はこの壮大な海があるから成り立っていて、私たちは水の恵みを受けて地球で幸せな暮らしができるのです。乾いた大地をいやしてくる水。私たちの傷ついた心をうるおす水。水は生き物全てに命を吹き込んでくれるものです。だから私は、命の恩人である水を、未来の子孫たちにも輝いたまま残す責務があります。

私たちの大熊中学校校歌にこんな一節があります。「呼べばこたえる太平洋。紫金かがやく阿武隈や。流れて清き熊川や。わが古里は幸多し。」壮大な海の美しさ、きらきら輝く阿武隈の山脈、清らかな熊川など、今は見ることができません。しかし、何年経っても私たちの古里は大熊町です。あの三月十一日の出来事は思い出したくない気持ちです。しかし、私たちが忘れてはいけないことも事実です。今は、私たちの古里にたくさんさんの幸せが戻ってくることを願っています。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

その名に恥じぬ星にするため

山梨県

山梨大学教育人間科学部附属中学校 二年

小平 守莉

「青い星、地球」

宇宙から見る地球は他の星と違い、優しく包み込むような深い青色をしている。

「水の惑星」とも呼ばれる地球の水の量は十四億立方メートルと言われ、その九十七％は海水、残りの三％のうち約七割が南極や北極の水が占めている。

「水の惑星、地球」

しかし僕達が生活用水として利用できる水の量は限られている。しかも国や地域によって水の量は大きな差があり、干ばつに苦しむ国も少なくない。そう、水は限りある貴重な資源なのだ。

そこで昨年の夏、僕は雨水を有効に利用できないかと考え実験を行った。

まずは雨水の収集、簡単にすぐ出来る方法として僕はペットボトルを加工し雨水を集める方法を思いついた。それはペットボトルの口にロウトをさし、ロウトにシャワーカーテンを取りつけ、それを壁に張りつける。これにより雨が当たる表面積が増え雨水はシャワーカーテンを伝いペットボトルに集まる。こうして夏休みの間に集めた雨水の量は二リットルペットボトル二十本以上にもなった。集めた雨水は靴や玄関を洗うのに使用したり、植木に水をあげたりする時に活用した。

実験の結果、軟水である雨水は硬水である水道水より洗剤の泡立ちがよく洗濯するのに適している事がわかった。僕の家では靴のほかに車を洗ったり、窓を拭いたりするのに雨水は重宝している。

気がつけば僕達の生活を支えている水は人の手によって精製された水道水だ。そしてこの水道水のもとをたどっていけば雨水にいきつく。それなのに僕達は大切な資源である雨水を活用することなく、無駄にしていたのだ。

この春「雨水利用推進法案」が参議院を通過した。この法案では雨水利用を推進するため国や独立行政法人が建築物を整備する場合、雨水利用施設を整備するよう取り組むことになっている。今まで無駄にしていた雨水を利用することで、水道の節約につながり、貯水タンクを設置で雨水の流出が減り結果的に洪水の抑制にもつながる。

また雨水の利用が普及することにより、新たな技術開発が盛んになり、家庭で水道水を精製することができたり、雨水発電といった新たな技術が生まれ、その技術がいつの日か干ばつで苦しむ人を助ける足がかりとなるかもしれない。

「青い星、地球。水の惑星、地球。」

しかし現実には世界中で七億人もの人が水不足の中で生活をしている。そしてその大半はアフリカなどの発展途上国が占めている。人が生活する上で水はかせない資源だ。そして安定した生活がおくれることで初めて産業や経済が発展するのではないだろうか？文明が生まれた場所が大河の流域であることからそのことはあきらかだ。水は作物を豊かに実らせ、人の命を育み、文明をうみだしてきた。僕達がこうして生活できるのは水があつたからだ。

今、僕の家には二リットルペットボトル八本分の雨水がストックされている。たった八本分の雨水だが、家族四人分の靴を洗うことができる。

資源である水を有効に使い、そして守っていくことが青い星地球、水の惑星地球に住む僕達の使命ではないだろうか。

そしていつの日かその名に恥じぬ干ばつのない、水不足で苦しむ人のいない本当の意味での「水の惑星、地球」になるよう、僕は僕にできる活動を続けていきたいと思う。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

多くの犠牲によつてできたもの

東京都

東京学芸大学附属国際中等教育学校 二年

山崎 蒼空

私も、蛇口をひねれば出てくる水が自然のままのものではなく何らかの過程を経て出てきているものであることは知っていた。それは多くの人が知っていることだと思う。しかし、こんなに長い時間、多くの過程を経て蛇口を通して出てくるとは思いもしていなかった。

先日、家族で東京都の西多摩郡にある小河内ダムに行ってきた。「ダム」をこの目で直接見るのはその日が初めてで、すごい迫力だと最初は感嘆しながら見ていた。高さ149m、長さ353mという巨大なダム。これを作るのに多くの人の労力が費やされ、多くの時間が消費された……ということは私にもわかった。しかし、ダムを造るにはそれ以上の「消費」が必要であった。ダムを造るには、たくさん水をためる場所が必要である。その場所をどのようにして確保したのかと疑問に思っていたが、一集落を沈めることで確保していたことには驚いた。墓は全て掘返して移送させ、そこに住んでいた人々ももちろん故郷を離れて移住せねばならなかった。このダムの建設にあたって945世帯もの人々が移住したという。また、建設の際に87名もの人が亡くなったという。このように多くの時間、人が犠牲になつて造られたこのダムは、電力を作つたり、川の水量を調整したりするのに大きな役割を果たしている。

このように、ダム一つを造るのにもたくさんの人、時間が必要である。小河内ダムの建設には戦争の影響もあったが約19年もの期間がかかったという。このダムに貯められている水が私たちのもとへ来るにもたくさんさんの時間と人を必要とする。ダムの水が川へ流れ、取水堰を通して浄水場へ行き、そこでも四段階の浄水が行われ、それから給水所、と本当に長い旅である。また、それ以外でも水源水質調査、理化学検査、自動水質計器による調査：等色々な検査が実行される。最終的に使われた水は下水処理場で処理され川や海に送られる。

スーパ―や自動販売機ではボトルで売っているし、家でも蛇口さえひ

ねればすぐに出てくる最も身近なものが水である。しかし、その水は実は裏で本当にたくさんの方が携わって使えるようになるのだと改めて思った。

日本では水があるのが当たり前だ。ある国際協力団体によると、水がなく、水を汲みに遠くまで歩いていき、その水が汲める井戸さえもきれいでなく、その水を飲むことで病気にかかる国も多々あるそう。こういう国もあるから「日本は恵まれているな」「日本に生まれてよかった」と思うかもしれない。しかし、私たちもダム建設にかかわった人々、自然の水を私たちの生活用水へと変えるのに関わっている人々の努力があるから安全でおいしい水が飲めているのであり、その方々の努力なしでは私たちは水を容易に使えはしない。

私たちは今、水をとても簡単に手に入れ、使っている。しかし、その水は人々によつて作り上げられたものであり、実はありふれているようなものではない。その水が与えられない人もいる。私たちに安全でおいしい水を提供するために犠牲になつた方もいる。「水を節約しよう」という言葉をよく見かけるが、その言葉を他人事のように思わず、私たちの生活に使える水を作つてくださっている方々のためにも水は大事に使うべきだと思う。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

我が家自慢のお米の秘密

島根県 大田市立北三瓶中学校 二年 森山 愛

「毎年ありがとうね。やっぱり愛ちゃんちのお米はおいしいわ。」

毎年秋になると、出雲市内に住んでいる母方の祖父母に、我が家で作ったお米をもっていく。家族みんなで力を合わせてつくった自慢のお米だ。だから祖父母のこの言葉を聞くと、とても嬉しく、そして誇らしい気持ちになる。

我が家のお米がおいしい理由。それは山水にある。田んぼに引く水も、お米を炊く水も、山水なのだ。

我が家は山水をポンプでくみ上げて使っている。同じ島根県内でも、祖父母の家と我が家では、水の透明度も味も全く違う。山水は塩素を使用していないので安心して飲める気がする。それになにより、水の甘さが比べものにならないくらい違う。このおいしい山水が、お米もおいしくしてくれているのだと思う。

我が家は山水をいろいろな用途で使っているが、水がなくなったことはない。しかし、出雲の祖父母の家では、昨年梅雨入りした後雨が降らなくなったとき、水不足が深刻な問題になった。祖母の話では、風呂の残り湯や米のとき汁を使って花の水やりや道路の水まきをしたり、水道水をおけにとって洗い物をしたり、洗剤を薄めて使ったりして節水したそうだ。

なぜ我が家の山水はなくならなかったのか。その理由を生まれたときからここに住んでいる父に聞いてみた。やはり今まで一度も水がなくなつたことはないという。

森林組合に勤めている父は、「木」が重要なポイントだと教えてくれた。山水がなくならない理由。それは木の保水力にあった。木が地面に根っこを張って水をためているため、大雨が降っても洪水にはなりにくく、大量の水が木の根にたまる。それが山水となるから、なくならないのだそうだ。

父にもう一つ、昔と今と、水の変化したところについて質問した。すると意外にも、変わっていないという。変わっていないのは木を守っているからだそうだ。本当に木と水はつながっているのだと改めて思った。父の話聞き、以前農林水産省に勤めていた祖父から、林野庁が監修した「森の質問箱」という本をもらっていたことを思い出し、開いてみた。その本の中には、森林は私達の生活に大切な働きをしているということ、人手をかけないで放っておくと、災害にあつて荒れてしまうこと、荒れた森林をもとの姿に戻すまでには長い年月がかかるということが書いてあった。

私達の生活になくってはならない水。それを守っている山や森林、そして木。あたりまえのように水を使い、森林もあたりまえの風景としてしか見ていなかったが、水も森林も、父のような守っている人たちがいるから、あるのだと思う。普段の生活の中で、水や森のありがたさを感じる場面は少ない。私も同じだった。しかし、父の話を読んだりして、いろいろなことを考えていかなければならないと感じた。

今の私にできることは何だろうか。
まず、今まで受け継がれてきた山水を無駄遣いせず、大切に使用していきたいと思う。祖母は節水の工夫をたくさん教えてくれた。それらことは、水不足でなくても大切なことなので参考にしたい。そして、森を守り木を育ててくださる方々に、感謝の気持ちを持ちたい。

今年も我が家の田植えが終わった。これからもずっとおいしいお米ができるよう、大切な山水を守っていきたい。

全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞（優秀賞）

清い水のために

東京都 東京中華学校 二年 潘 庸晶

「清い水」といえば、京都の清水寺を参拝する際、手と口を清める「禊の水」を思い出す。古来日本は水によって不浄なものや罪で穢れた者を浄める儀式があるが、これは水が常に清いものであるという意識が日本人の根底にあるからといえる。この国は世界一「清い水」に恵まれた国だ。大抵の川はきれいな水が流れているし、どここの水道水もそのまま飲める。これは日本が高度な技術により自然環境を護る努力を重ねてきた結果である。これらの技術で清い水を提供してくれることに私たちは感謝しなければならぬ。

しかし私が日本人の日常の水の使い方にいつも驚いているのも事実だ。私は中国に生まれ、日本で育ったが、水はまさに中国人の命そのものであった。入浴するときはシャワーで済ませるし、洗濯の残り水でトイレを流す。できる限り節水するのが常識だ。欧米、豪州、そしてアフリカ、つまり世界の殆どの地域で、水は限りある大切な資源であるという認識は共通している。だが、日本に住んでいると、水を無駄遣いする光景をよく見かける。蛇口を開け放しにしたり、浴槽の水を毎日替えて風呂に入ったたりすることは中国人の私には理解し難い。「湯水のように使う」という表現が「無駄遣いする」という意味で使われる国は恐らく日本だけだろう。中国では「清い水」というものが少ない。工業排水と生活排水の70%が未処理のまま、これが公害の原因となっている。北京のような大都市の水道水にも、日本では感じることはない泥やサビの臭いがし色も濁っていて、そのまま飲むと下痢をする。つまり水不足以上に深刻なのが水汚染である。生活排水に含まれる有害物質が、河川や海を汚し魚貝類を汚染する。

世界的に水問題は他人ごとではなく、日本にも深く関係している。水は人類の共同資源で、国境を越えて循環している。世界は水の運命共同体といえる。中国の水汚染はいずれ日本にも影響を与えるようになる。日本は食料を大量に輸入しており、もし輸入先の国が水不足になれば、

日本への輸出を中断してしまうかもしれない。食料自給率の低い日本にとって大打撃となるだろう。

では今、私たちは何をすべきか。日本は高度な技術力に支えられた水大国としての自負をもって、世界をリードし、積極的に水問題の解決に取り組むべきだと考える。次の三点について、先ずアジア諸国で活躍して欲しい。

① 節約の知恵による技術の手本となる

日本人の「心遣い」が表れた最新技術による漏水防止技術、給水制度、節水設備たとえば水を使わず排泄物を封じるトイレなど。

② 汚染処理技術の提供

日本は高度経済成長がもたらした汚染を除去、清浄化するための世界最高レベルの技術力を有する。微生物や植生による浄化を含め、ダム貯水池における冷水放流、濁水長期化、富栄養化等の対策などを積極的に提供していくべき。

③ 海水の淡水化技術の提供

世界一優れた海水淡水化技術を他国と共有し、この美しい地球に貢献すべきだと思う。この淡水化技術が世界各地にあれば、どの国も水不足から脱し、豊かな農業をも可能にできるだろう。

国の政策だけでなく、まず私たち一人一人の水に対する意識を高めることも大切である。その上で官民あげて各国が協力し合い、このような活動を世界に広めるべきだと痛感する。

人間の涙がしょっぱいのは、祖先が海の中で誕生したためといわれている。世界の水の最後の一滴が、人類の涙とならないために、私たちはこの地球の水を守る義務と責任がある。私たちが代々残すべきものの一つが「清い水」である。この国の技術と精神が、水のように国境を越え、世界を救う日が来ることを祈りつつ。

入選

祖父母が教えてくれた水の大切さ

北海道 美唄市立美唄中学校 三年 久恒 朱結

私の家には、古い井戸がある。今ではもう使われていないが、数十年前までは生活用水として利用されていたものだ。祖父母に話を聞くと、昔は釣瓶という道具を使って、水を汲んでいたという。それは、子どもが毎日する仕事で、かなりの重労働だったそうだ。その後、水道の普及とともに、井戸そのものが姿を消していった。

今では、蛇口をひねればいつでも簡単に水が出てくる。使いたいだけ使えるし、好きな時に飲むこともできる。使い終わった水も、集めて処理されるようになった。このように、現在は上下水道が整備され、私たちは快適な生活を送っている。

それでも、昔の経験からか祖父母は、「水の出しっ放しは、もったいないよ。」

「油は流したらだめ。洗剤は少なめにして。」
などと、水を大切にしようしつこく言ってくる。私は、その言葉を聞くたびに、うるさいなあ、としか思っていなかった。

ある日のこと、朝起きて顔を洗おうとしたら、水がちよろちよろとしか出なかった。変だと思いき、母に言うと、母も台所の水が出ないという。調べているうちに、ついに水が出なくなってしまった。朝食から味噌汁がなくなり、野菜も洗えないので、簡単な食事になった。トイレには、お風呂の残り湯をバケツで運んで使った。勢いをつけて流さなければならず、苦勞した。水がないということが、こんなにも不便なことだとは思わなかった。

そのとき、ふと祖父母の言葉が蘇ってきた。いつも言われていた「水を大切にしなさい。」という言葉。確かに祖父母は、人に言うだけあって、洗顔や食器洗いの時は、水を出しっ放しにはせず、必ず容器に水を溜めてから行っている。お風呂の残り湯も、洗濯や掃除、植物への水やりに使っている。少しの水も無駄にはしないのだ。祖父母が子どもの頃、家の周り

に虫が飛び交い、近くを流れる用水路には大きな蟹や魚がたくさんいたという。今ではその姿を見ることはできない。それは、水が汚れたからだというのだ。油や洗剤で水を汚すと、きれいにする為にはその何百倍もの水が必要だということも聞いたことがある。祖父母は、小さな頃から苦勞して水を手に入れてきただけに、水の大切さを誰よりもわかっているのだ。だから、便利になった今でも、水を大切にしなさいと言ってくるのだろう。

それに比べて私は、水は使い放題のような感覚でいた。水を汚すことも関心を持ってはいなかった。この断水是、こんな感覚でいけば、いつか取り返しのつかないことになるという警告だったのかもしれない。祖父母の忠告を素直に聞いておけば、と後悔した。

世界保健機構によると、世界人口の約十三%である九億人が、汚染された水源を使わざるを得ない状況にあるという。その非衛生的な水が元で病死する人は、毎年二万人以上にもなる。また、国連世界水発展報告書によれば、今世紀半ばには、最悪の場合六十カ国、七十億人が水不足に直面するという。決して人ごとではないのだ。

水道普及率がほぼ百分の日本に住む私たちは、恵まれた水環境にある。だが、ちよつとした気の緩み、水への無関心さが、簡単に水をだめにしてしまうことを忘れてはいけない。水に恵まれている私たちこそが、今率先して水を大切に扱い、水の環境を守っていかなければならないのだ。私も、祖父母が言うとおり、水の無駄遣いをしないよう、油や洗剤で水を汚さないよう、毎日気をつけるようにしている。一人一人の僅かな努力も、皆でやれば必ず大きな力になるはずだ。

家の井戸を見るたびに、苦勞しながら水を汲み、そして水を大切にできた祖父母の姿が浮かんでくる。祖父母の「水を大切にしよう」という言葉を胸に、私もかけがえのない水を守る一人として、水と向き合っていきたい。

入選

水からのメッセーじ

青森県 青森県立三本木高等学校附属中学校 一年 梅田 千恵梨

普段、私達が当たり前のように入用している水。水は、私達の生活にかかせないものである。その水は、一体どのような手順を経て、私達の元へ届いているのだろうか。

私の住む十和田市では、水道は全て地下水を利用している。十和田市には、五万年以上前の十和田火山の噴火時にできた、火山灰や溶岩が積もった地層があり、自然のフィルターの役目をしている。これにより、雨が何年もかけてしみこんだ地下水を、私達が飲める水に変えてくれるという。十和田市は、地下水が豊富なのだ。

また、私の家の近くには、江戸時代の一八六〇年頃に工事が始まった、人工の河川の稲生川がある。川のない荒地地だった三本木原台地を開拓した、新渡戸傳翁、十次郎親子らのがんばりにより完成した稲生川は、現在も多くの水田に水を送るなど、私達の生活を支えている。

次に、私達がどんな時に、どのようにして水を使用しているのかについて考えてみる。通常私達は、一人あたり一日二百から三百リットルの水を使用している。その中には、飲む水はもちろん、洗濯、食器洗い、お風呂の水、手や顔を洗う水などがある。家庭用水の中でも特に水を使うものは、トイレだそう。一度に約十二から二十リットルの水を使うトイレで、二リットルのペットボトルが約六から十本分になる。誰もが毎日使うトイレでこれだけの水を使うとなると、家庭では、毎日多くの水が使われているということが分かるだろう。

しかし、地下水や稲生川などの川の水も、そのまま家庭で使い、また川に戻すなどということはできない。そんな時に最も重要な役割を果たしているのが、ダム、浄水場、下水処理場だ。私は、四年生の時の社会科見学で「毎日使う水」について調べた。雨が降ると、雨水はダムに溜まり、川へ流れて行く。途中、取水せきから浄水場へ送られた水は、消毒され、安全な飲み水となる。そして、私達に使われ、汚水となった水

は、下水道を通過して下水処理場へ行く。そこできれいにされた水は、川から海へと流される。海の水が蒸発すると雲になり、また雨となって降ってくる。水はこうして姿を変えながら、私達の周りを循環しているのである。

このように、水は自然の力と多くの人の手によって、私達の元へと届く。限りある資源である水を大切に使うために、今私達が取り組むべきことは、節水だ。

私の家は四大家族で、一ヶ月に約二十三立方メートルの水を使用している。我が家では、水道の水は小まめに止めたり、洗濯のすぎの回数を一回にしたりして節水に努めている。これからは、洗濯をする場合は、お風呂の残り湯を使ったり、トイレでは、流す水を減らしたりするなど、新たな工夫をしていきたいと思う。

節水とは、意識をすれば、誰もができることであり、より多くの人が取り組んでいくことで、水を守ることができる。

毎日の暮らしのため、健康を守るために、なくてはならない水。水はきつと、

「安全で安心な水を飲むために、一人一人が水を守る努力をしてみませんか。これから先も、支え合える関係であるために。」

と、伝えたいのではないかと、私は、改めて水の大切さを実感し、今日からより一層、水を大切にしたい。

入選

生活を支える水

岩手県 盛岡市立飯岡中学校 二年 五代儀 光夏

私は、五年生の時に「カシオペア百キロメートル徒歩の旅」に参加しました。これは、岩手県内の小学生が対象の四泊五日の旅です。浄法寺を出発し、一戸町、九戸村、軽米、そしてゴールが二戸市というルートでした。旅は八月に行われたため、日差しは強く、毎日が真夏日。熱中症を防ぐために、こまめに水分補給をしながら歩きました。また、各休憩ポイントではタオルを水でぬらしたり、首に水をかけてもらったりもしました。周辺の学校のプールに入った時は、とても気持ち良く解放的な気分になり、疲れも少しとれたように感じました。五日間の旅で、初めは余裕をもって歩いていましたが、さすがに三日目、四日目となると、疲れもピークに達していました。

そんな四日目に、最大の難関である折爪岳登山がありました。登山前に、私は湧水を飲みました。その湧水は折爪岳の麓、「岳の湧口」と呼ばれています。「岳の湧口」の周りは、空気がひんやりしていて、水に手をつけると、真夏なのにびっくりするぐらい冷たかったことを覚えています。旅は終盤、連日の最高気温に加え、疲れもピーク。そんな中で飲んだ湧水は、体に染みわたり、山に登る元気をくれるような水でした。今まで飲んだ水の中で最高においしかったです。それまで水をこんなにもおいしいと感じたことはありませんでした。また、湧水を飲んだのは初めてだったので、とても新鮮に感じました。

今振り返ってみると、あの旅は水がなければ完歩できなかったと思います。あんなに水に頼り、なおかつ水のありがたみを実感できたのはあの旅が初めてでした。

そんな経験があったにも関わらず、今の私は大切な事をすっかり忘れてしまっています。風呂では、シャワーを出しっぱなしにし、母に注意されることもしばしば。食器などを洗っていても出しっぱなし、また、

学校の蛇口から少々水が出ていても、さほど気にはならなくなってしまっています。「蛇口をひねれば水が出る」そんなあたりまえの感覚にとらわれているのです。

無意識のうちに無駄遣いしている水。普段使っている水道水は、川から水をくみ上げて使われています。そして、川の源流が湧水である所もあります。湧水は、気象条件、そして人の手によって、最悪の場合は枯渇してしまうこともあるそうです。人と自然が上手く共生しなければ、川の汚染が進んだり、水量が減ったりして、しまいには川がなくなってしまうのです。私たちが、水を確保するためには、川や湧水を大切にし、守らなければならないのです。

岩手には名水がたくさんあります。いわての名水二十選のひとつが湧水です。私が飲んだ「岳の湧口」もその中の一つです。また、湧水のうち二種類は、国の名水百選にも選ばれています。岩手に名水が多いのは、自然が豊かで、地域の人に大事にされているからだと思います。

人は、水がなければ生きていくことはできません。三年前の東日本大震災で私達は実感しました。私の家は一週間水が出ず、他からポリタンクに水をくんできて使っていました。食事、洗顔や歯みがき、洗たく、トイレなど家族で少しずつ大事に使っていました。また、風呂は一か月使えず、知り合いの家のお風呂を借りたり、少し離れた銭湯に行ったりしたこともありました。

このように、色々思い返すと、水の大切さを改めて思い知らされます。震災の時に家族と水の少ない生活をしたことや、旅でたくさんのおいしい水にお世話になった事を忘れず、今後は水をもっと大事に使うこと、また、川などの水資源を守るための私に出来る小さな努力を続けていかなければと思います。

入選

自然からいただいた水とともに

岩手県 盛岡市立飯岡中学校 二年 熊谷 希

「ふはあ」

溶けてしまいそうなほど暑い中、防具をはずし、すぐさま水筒へと走り込む。水分を口にする、体に染みわたっていくのが分かる。生き返った心地がする。やっぱり、頑張った後に飲む水はいつも以上に最高だ。私たちは、自然にめぐまれた岩手に暮らし、おいしい水を飲むことができる。それを当然のことだと思っていないだろうか。

二〇一三年の夏。ニュースや新聞で大きく取り上げられたものは、ダムの水不足。全国的にダムの水位が下がっていった。前年はこんな事はなかったと思う。このようになってしまったのは、もしかしたら私たちの生活にも原因があるのではないか。ダムの水不足には、大きく分けて二つの理由があるようだ。

一つは、自然の問題だ。気候が最も影響している。雨や雪が降らなければダムの水はなくなってしまう。特に、ダムの水不足の影響が大きかったのは西日本や四国の辺り。七月以降、太平洋高気圧とチベット高気圧（中国方面からの気圧）が強まってきて、西日本を中心に全国的に暑夏となった。高知県では最高気温が四十一度。日本の最高気温を更新した。それほど、晴れの日が多かった。

ところが、四国や東北地方では、台風などの影響で大雨の日が続き、土砂災害等も多く発生した。このように、天候に左右され、降水量が上下すると安定的な水の供給は難しくなってくるのだ。

もう一つは、私達がたくさんの水を使うことによって水不足は起こる。ダムの水不足が大きく取り上げられた時、その現状とともに言われたことは、節水。節水と簡単には言うが、なかなか簡単にはできないものだ。

水を使わなければ、私達は生活できないからだ。

効果的な節水の方法としてよく知られているのは、流しっぱなしにしないことだ。これをするだけでも一人で約六リットル節水できるそうだ。皆に知ってほしいから言っているのではない。実行してほしいから、さげばれているのだ。ただ知っていてもやらないのが人間である。ところが、いざとなった時私達は必死になる。

例えば、二〇一一年三月十一日。私の家では、震災の二日後に水が止まった。かろうじて、一つの蛇口は山から水を汲んでいた。災難は逃れた。その後、ライフラインが復旧してから世間では、節水・節電をするように口酸っぱく言われた。その時は必死になって心がけた。しかし、節水・節電の意識は日に日に薄れていった。

言われてからやる、では遅い。必死にならずに普段から心がけていく。あの時のような災害が起こっても、これからの努力の積み重ねが、少しでもよい生活に導いてくれるかもしれない。

そして、自然を守ることと同じように、私達は水も守るべきだと思う。自分たちの生活に必要な不可欠のものなのに、ありがたみを感じていないように思うからだ。私達の生活は、水と関わった生活である。当然と思うのではなく、「水＝命」ともいえる私達人間が、もっと水との暮らし方を考えてみるべきである。

水は無限ではない。自然からいただいた水を、もっと大切に使うために、様々の視点から見てよりよい暮らしをさがしていきたいと思う。

入選

後世に引き継ぐ水

先日、「世界一大きな授業」を受け、世界の子どもの達の現状を学びました。私達が毎日、普通に通っている学校に、水くみの手伝いのために行けない子どもが大勢いることを知りました。毎日二十二十kgの水をかっつき、三kmの道のりを三往復する。蛇口をひねって出た水がそのまま飲める日本では、考えられない現実です。やっこの思いで運んだ水でも雨水や泥水なのです。そのため、下痢やメジナ虫病という病気にまでかかってしまうこともあるそうです。世界の水の現状に心を痛めると共に、日本は恵まれた環境にあるのだと改めて気づいた瞬間でした。

私の住んでいる姥屋敷は雄大な岩手山のふもとにあり、どの家庭でも井戸を掘って山のおいしい水を飲むことができます。「世界一大きな授業」を受け、自分の家はこうしてこの地に根をおろし、井戸を掘ったのか興味湧き、同居している曾祖父と曾祖母に聞いてみました。八十九歳の曾祖父と八十七歳の曾祖母は山形県出身で、六十七年前に岩手に来ました。当時は、現在の家から二百m程離れた場所に山の沢水が湧き出ており、その水にはれて家は沢水に近い場所に建てたといいますが。スコップやとうぐわを使って土を掘り、井戸を作ってバケツで水を運ぶ生活。蛇口をひねれば簡単に手に入る現代の水とは重みが違うと思えました。何より、水が豊富で常に水がある環境だったため苦労はなかったと話す姿に、いつの時代も「水」というものの存在は大きいのだと感じました。

ところがこの間、地区のゴミ拾いをしてがく然としました。道路や川にペットボトルや缶などのゴミがたくさん見受けられたからです。中には長靴や車のオイル缶などもありました。誰もが走る車をとめて風景を眺めたり写真を撮ったりしている、岩手山のふもとの緑豊かで美しい私

岩手県 滝沢市立姥屋敷中学校 三年 鈴木綾

達の地区は、道路をみるとゴミが散らばっている地区だったのです。日本は「水の豊富な国」とも言われていますが、それは豊かな自然に裏うちされたものなのです。世界の気候の中でも珍しい四季があり、梅雨の時期もあります。それらの自然の恵みが木々の根をつたい、土にしみ込み、長い年月をかけて私達に水を届けてくれるのです。蛇口をひねればいとも簡単に大量の水が手に入る現代は、私達に大切な事を忘れさせているのではないのでしょうか。

先日、祖母と岩手山登山をしました。初めての挑戦に気分が高まり、元氣一杯の私でしたが、五合目を過ぎてから疲れがみえてくるようになりました。その上小雨が降り出し、霧も出てきて、八合目に着いた時には身も心もすっかり渴ききっていました。八合目には評判の水があると以前から聞いていた私は、何よりも先に、湧き水をすくって飲みました。冷たさとおいしさが口一杯に広がり、私ののども潤いました。また、少し体も軽くなり、頂上を目指そうという気力も生まれてきました。それまで朦朧としていた頭も何だかすっきりとしてくると、疲れが一気に吹き飛んでいくのが分かりました。こんなにも水は私達に力を与えてくれるのだと、改めて水の偉大さに気づいた瞬間でした。

普段は気にも留めない水ですが、私達が水から受けている恩恵は計り知れません。何もない土地を切り拓き、それでも清い水が苦労を感じさせなかったと話す曾祖父の言葉に人間が生きる上で大切なことを教えられました。世界の中でも誇れる水を持つ日本。このことの意味を今一度考えたいと思います。飲める水が苦労なく手に入ることに、感謝の気持ちを持ち続け、後世へとつなげていかなければなりません。それが私達の責任だと強く思っています。

入選

少しの意識で変わる未来

飲料、料理、トイレ、お風呂と、水は私達の生活に必要な不可欠な存在である。これはどの国でも、いつの時代になっても変わらないことだろう。

父は昔、青年海外協力隊の一員として、発展途上国を支援していた。それらの国では、幼い子供たちが長い道のりをかけて、茶色く濁った水をくみにいくそうさ。私はその話を聞き、とても胸が痛くなった。

社会の授業で、地球は「水の惑星」だということを知った私は、父の話や話を聞くまで、世界の水事情など考えもしなかった。ましてや、蛇口を捻ればいつでもきれいな水が出てくる日本という国に生まれたのだからなおさらだ。

そんな私が初めて水の大切さを実感したのは、忘れもしない三年前のあの日。千年に一度といわれる巨大地震と大津波がふるさと石巻をおそった。そしてその影響により、電気、ガス、水道のライフラインが全て途絶えてしまったのだ。幸い、電気の代わりにろうそくで明かりを灯し、ガスの代わりにカセットコンロで代用することができたが、水だけはどうしようもなかった。のどがかわいていつものように蛇口をひねっても水は出ない。トイレの水を流したくても、水は出ない。どんなに温かいお風呂に入りたくても、水が出ないから入ることができない。

度重なる余震におびえながら、私はこの日初めて水の大切さを痛感した。水は生きていくために絶対に欠かせないものであること、蛇口をひねれば水が出てくることはとても幸せであること、水を大切にしなければいけないこと。数多くのものを失ったこの震災で学んだこれらのことは、これから先もずっと心に留めて生きていこうと思う。

私達の生活は、水によって支えられている。だからこそ、地球上の全ての人々が安全でおいしい水を飲めるようにしなければならぬ。

小学三年生の時の総合の授業で、学校の近くの川に行ったことがある。

宮城県 石巻市立稲井中学校 二年 勝然 みなみ

私はその時、あまりの汚さに言葉を失った。当然、その川に魚はいなかった。当時は「どうして魚がいないのだろう。」と疑問をもったが、汚れた川に生物など住めるはずがない。父が子供のころはプールがなかったため、よくその川で魚と一緒に泳いだそうさ。昔はそれほどきれいな川だったのだ。

そして、その川を汚した張本人は私達人間。油や洗剤の使い過ぎによって、何十年もかけて汚染され、生物達はすみかを失っていった。

水の惑星、地球でも、私達人間が使用できる水はごくわずかだ。この先、人口が増加したり、砂漠化が進んだら、地球の水はどんどん少なくなっていくのだろう。

私達の住む日本は、水資源にとっても恵まれた国だ。だからこそ、このままではいけない。私は東日本大震災をきっかけに、水を大切にしようになった。節水を心がけ、生活排水を少しでも減らすため、料理後の油は、新聞紙でふきとってから洗うことを母に提案したりもした。

私達一人一人がこのようなことを意識し、実行することによって、未来の地球の姿は変わっていくのではないだろうか。

水は私達人間、そして地球の七十パーセントをしめ、私達の生活を支え、様々な幸せをもたらしてくれる。蛇口をひねれば水が出てくる幸せも、大切にしなければいけない。

水は自然からの素晴らしいおくりものだ。私はこれから先も、ずっと水を大切にしていきたいと思う。そして、地球上の全ての人々が安全でおいしい水を飲むことができる未来を願う。水という素晴らしいおくりものを未来に伝えることは、私達の使命であり、義務なのだから。

入選

水を救おう、少し掬おう

茨城県 土浦日本大学中等教育学校 一年 加藤 涼芳

「あれっ、水が出ない、断水だ。」
母の声が、響きました。あの東日本大震災の時、私は初めて水が使えない生活することとなりました。その悲惨な出来事は、先生の甲高い声で始まりました。

「みんな、机の下に隠れなさい。」
教室がぐらぐらと揺れ、だんだんひどくなっていきます。「いつもと違うぞ。」と思い、机の足をぎゅっと掴んで、顔からは笑みが消えました。この後私は、水について深く考え直すことになるのです。

怪我一つなかった私は、変わり果てた通学路を母と家に向かいました。玄関を開けると、水の流れる音がします。無言で顔を見合わせ、音をたよりに原因を探すと、トイレの水が流れっぱなしになっていました。急いで水を止め、床を拭きました。しばらく散乱した物を片付け、一休みするため手を洗おうと蛇口を捻った時には、もうどの水道からも水が出なくなっていました。水が出ないと、手も洗えない、水も飲めない、ご飯も炊けない、トイレも流せない、お風呂にも入れない、出来ない事だらけです。このまま水が出なかったらと思うと、大きな不安が押し寄せて来ました。

今までの私は、水道からたくさんの水を流し、お風呂には温かいお湯があふれ、夏にはプールや海水浴、冬にはスケートを楽しむ、水に囲まれた生活が当たり前だと思っていました。でも、それは間違いでした。水は、限りある自然の恵みであり、多くの人の支えによって私の元に届いていたのです。毎日、大量の水を使っていた私にとって、水のない生活はとても不便で大変なものでした。この時、人は水がないと生きていけないという事を思い知らされたのです。それ以来、私は水が大好きになりました。蛇口から出てくる水に感謝し、傘に当たる雨におかえりなさいという思いを寄せ、川や海は見ているだけで心が落ち着きます。そ

して、水について考えるイベントにも参加しました。土浦の誇りの一つである霞ヶ浦は、国内で二位の広さが自慢ですが、水が汚れていて、それをどう解決していくかがテーマでした。この事を知った誰もが、何とかしなくてはいけないと思ったはずです。

小学生の時、浄水場と下水処理場について学びました。では、自然界ではどのようにして浄化されるのか調べてみました。その仕組みは、私が想像するよりもはるかに素晴らしい物でした。水は、めぐりめぐる中でどんどん奇麗になっていきます。蒸発する時に汚れを除き、雨となって土というフィルターにこされ川を流れる時には微生物が活躍してくれます。また、植物は水の汚れをこしてから蒸散してくれていました。ただ残念な事は、その浄化力を超える汚水が流出しているという現状です。それに加え、温室効果ガスもたくさん放出されています。温暖化が進むと、蒸発する水と雨の量が増えバランスを崩し、洪水や台風や干ばつなどを引き起こします。だから、人々は水という自然と上手に付き合う必要があると思いました。振り返ると、生まれてから水を使わなかった日は、一日もありません。生きるという事は、水を大切にしなければいけないという事なのです。

現在、我が家では出来る事から取り組んでいます。例えば、水道やシャワーを出しっぱなしにしない、残り湯で洗濯する、バケツに汲んで洗車する、米の研ぎ汁は植物にかける、洗剤や油で水を汚さないなどです。水を大切にするという事は、水を使わずに生活するのではなく、一人ひとりが少しずつ気を付ければ、水を取り巻く環境は改善されるのです。そして、それは実現できます。東日本大震災の時、みんなですりつ節電をして電力不足を乗り切ったように、ひとつひとつはささいな事でも合わせれば大きな力になるという事を、私達は、経験しているのですから。

入選

井戸を見直そう

私達の身近にある水―日本のように、いつも水道からきれいな水が出る国は、ほとんどないと言っていていいでしょう。毎日、たつぷりのお湯でお風呂に入れるし、水を飲みたくなれば、蛇口をひねっていつでも飲めます。私達にとってこのようなことは、普段の生活でしている当たり前のことです。今まで当たり前すぎて、あまり考えたことはありませんでしたが、改めて考えてみると、とてもありがたいことだと思えます。

私の住んでいる栃木県佐野市は、自然豊かで山に囲まれており、地下水が豊かです。佐野市では、その水を浄水場できれいにし、各家庭に給水しています。凝集剤注入や塩素注入など科学技術の力で、安全な水を使うことができるのだということが分かりました。このように、きれいなおいしい水が飲めるということはとても幸せなことだと思います。

しかし外国では、日本のようにきれいでたくさんの水を使えるところは、多くはありません。アメリカのラスベガスは砂漠の中にできた都市で、水が不足しています。そのため、水を使い過ぎると、多額の罰金を払わなければならない、という決まりがあるそうです。

また、日本でも災害時には、水が使えないことがあります。三年前の東日本大震災の時に祖父母の住む茨城県が何十日間も断水になりました。停電や余震をおそれながらの生活は、とても大変だったと思います。お風呂に入ること、トイレで水を流すこと、水道水を使って料理をするのと、いつも当たり前のようにしていることができなくなってしまうたそうです。いとこは当時赤ちゃんでしたが、何日もお風呂に入っていないかのために、しっしんができ、ついには皮膚炎になってしまいました。私はそのことを聞いた時、とてもかわいそうだと思いました。私の家は断水にはならなかったのですが、何とかして来てほしいと頼みました。

しかし、数日後の電話で赤ちゃんのしっしんが治ったことを知りました。その話を聞いた近所の人が家の井戸を貸してくださり、それをわか

栃木県 佐野日本大学中等教育学校 一年 中村 華

してお風呂に入ることができました。その井戸は、長い間使っていないかだったので、震災の後もう一度手入れをし、断水の期間にたくさんの方の生活を支えました。

私はそれまで、井戸を使っていたのは大昔で、今はどこにもないものだと思っていました。早速井戸について調べてみると、実はつい最近まで日本人の生活になくはならないものだったと分かりました。井戸は、約九千年前から使われていました。井戸ができたことよって、より水が身近になり、いろいろな場面で活用され、人々の生活を豊かにしていたと思います。しかし近年、衛生の基準が厳しくなり、井戸は日本の社会からだんだん姿を消してしまいました。水道は、浄水場の機械や、薬を使って水をきれいにするので、いつも安全な水です。しかし、井戸の水は土地や時期に水質が左右され、また管理も大変なため、使用してはいけなと言われることが多くなり、井戸の数が減ったそうです。しかし、井戸は災害時に大いにかつやくしました。井戸の水で救われたという人もたくさんいました。そして、震災をきっかけにして、井戸を見直し、作りたいと思う人が増えてきているそうです。

私達が豊かに暮らしていくためには、浄水場で水をきれいにし、水道の設備を使って各家庭に給水することが不可欠です。しかし、それと同時に昔から日本人が活用してきた井戸を見直し、整備し、再び活用していくことも大切ではないでしょうか。新しい科学技術と古い伝統が一緒になった時、日本は大きな力を得て豊かな水を持つ国になります。私は水をかけがえのない資源として、大切に使用していきたいと思えます。

入選

故郷の水を守るために

清流那珂川が流れる私の故郷では、四季を通して美しい景観を目にすることが出来る。きれいな水と空気に恵まれた里山には、斜面地を利用したたくさんのお米が広がっている。中には、日本のお米一〇〇選に選ばれている美しいお米もある。

私の祖父母もお米を作っている。そのため、我が家では毎年、おいしいお米を食べることが出来る。

私がまだ小学校二年生のとき、夏になり祖母と一緒にお米を見に行ったことがあった。そのとき、私は祖母に素直な疑問を投げかけた。

「どうしてここはいつもお米がたくさんとれるの？」

「ここは水がきれいだからねえ。」

「水がきれいじゃないとダメなの？」

「あたり前だよ。汚かったらなにもできないんだから。きれいな水のおかげでお米がたくさんとれるんだよ。」

そう祖母が教えてくれた。そのとき八歳だった私には、水が万物にとつてどんなに貴重なものかはわからなかった。だが、「きれいな水が大抵だということ」は祖母の言葉から伝わってきた。

私の学校では、毎年冬に那珂川をきれいにするために河川敷清掃を行っている。昨年は十二月の土曜日に実施された。当日は九時に学校に集合し、保護者や漁業組合の方々と一緒に徒歩で河川敷に向かった。その途中、空き缶やたばこの吸い殻などがたくさん落ちていた。河川敷に到着すると、川沿いに目立ったごみはなかったが、草むらわをのぞいてみると、タイヤや電化製品などがらくたが捨てられていた。その他にも、燃えかすの中に釣り針が埋められている状態が捨てられていた。また、放置された鮭の死骸が異臭を放っていた。川の水が汚れば、自然界の生き物や人間にも少なからず影響がでる。あきらかに故意に捨てたと思えるゴミを目にして、とても残念な気持ちになった。

栃木県 茂木町立中川中学校 三年 廣木 未唯

その一方で、一つだけ嬉しいこともあった。それは、ゴミが多いとは言っても、年々その量が減りつつあることだ。こちらからも、地元の水をみんなの手で守り続けていきたいという気持ちが強くなった。まずは、水を流しっぱなしにしない、家庭の台所から油を流さないなど、誰にでもできることから実践していきたいと思う。

貧しい国には、泥水を飲んで生活している人もいる。水をくむために毎日何キロも歩いている子どももいる。新鮮な野菜もお米も作れない。私たちは、きれいな水を飲んで、おいしいお米を食べることが出来る。これはとても恵まれていることだ。だからこそ、有限である水を私たちが大切にしなければならぬ。

あるとき、ニュースで他の地方のお米の病気や害虫などの被害を受けたことを報道していた。そのとき、私の家は一つ問題が起きていなかった。それどころか、毎年、決まった量かそれ以上のお米を収穫していた。それは、祖母が言う「きれいな水のおかげ」なのだろう。また、水に恵まれたお米やその周辺には様々な植物や生物が生息している。中にはハッチョウトンボのような珍しいトンボの姿も見ることが出来る。これも、「きれいな水」の恩恵の一つだ。

春になると、お米一面に張られた水が輝き出し、田植えが始まる。夏には、緑色の稲が太陽に照らされ、ぐんぐん伸びていく。秋になれば、黄金色の稲が揺れ、収穫へと向かう。やがて冬を迎え、山々と段々畑には雪が静かに降り積もる。私は小さい頃からこの風景を眺めながら育ってきた。この故郷の景観を保つために必要不可欠な豊かな水。その水を守るために、今できることを行っていきたい。

入選

生命の水

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 二年 長岡 京花

「地球は青かった。」

これは宇宙飛行士のユーリイ・ガガーリンの言葉である。彼は、宇宙飛行を終え、一九六一年に帰還した。そのときの地球を見た感想がこれである。この言葉で象徴されているように地球は水の惑星と呼ばれる。そんな風と呼ばれるくらいだから地球には水なんて有り余るくらいにあるだろう……。一般的にはそう思われている。現に私がそうだった。

しかしある日。何気無く流れていたニュースに私は釘付けになった。

「地球上の水資源のほとんどが海水であり淡水はわずか三パーセント。さらに人類が利用できる水になると総量の0.01パーセントに過ぎない。」というような内容だった。私は耳を疑った。地球の水にはかぎりがある。水はとても貴重な資源であることを知った。

日本は比較的降水量が多く水資源が豊かな国である。蛇口をひねれば必ず飲み水が出てくる。しかし、そうでない国もある。というより、日本が例外なのだ。世界の国では、一〇億人以上の人々が安全な水を手に入れないでいる。そのうちの、四億二五〇〇万人が子供だ。そして、現在八秒に一人の子供が汚水の原因として亡くなっている。今、この瞬間にもひとつの命がなくなっているのだ。

だが、その裏を返せば「たくさんの人々が水によって生かされている」ということになる。そう考えてみると水は本当にすばらしいものだと思う。水を飲むこと。それは「生きる」ということなのだ。

人間は、水がなければ死んでしまう。水は私たちにとって必要不可欠だ。しかし、それは人間だけに言えることではない。たとえば動物だって水を飲むことで生きている。植物だって水をあげなければ枯れてしまう。つまり、この地球にいるすべての生き物が水によって生かされているのである。

その反面で、水によって失われる命がある。三年前の三月十一日。巨

大な波が日本を襲った。あの日の出来事は決して忘れることはできない。当時、まだ小学生だった私はいつものように教室で授業を受けていた。すると、突如大きなゆれが私たちを襲った。怖かった。

午後になって私は家に帰った。そして「今日の地震がニュースになってはいないだろうか。」そう思い、何気無くテレビをつけた。画面に映った映像は悪夢のようだった。次々と襲い掛かる大きな波に消えていく人々……。家も家族も思い出も……。何もかも、そうすべてが水に消えていった。私は言葉を失った。「こんなことがあるなんて。」衝撃だった。沢山の命が失われたこの日。私は、初めて水に対して恐怖を感じた。

水と生命の関係。そこには深いつながりがあると思う。水によって生命は誕生した。そして今もなお、私たちは水によって生きることができている。動物だって、植物だってすべては水から始まった。改めて考えてみれば、私たちが普段身につけている洋服。これだってスタート地点は水ではないだろうか。水が植物や動物を生み、そこから布を作った。そうして私たちは服を着ることができている。これは、衣食住すべてに

いえることではないだろうか。そう考えてみると水はすごい。私が、今こうして生きていられるのもすべては水のおかげであると改めて思った。一方で、水によって失われる生命もある。それを忘れてはいけない。水が生み出した生命を水によって失う。なんとも言えないが私は悲しい。水によって生まれる生命。水によって失う生命。二つの生命が存在する。そして私はふこう思った。「水とは生命そのものではないか。」と。水Ⅱ生命。それは水が私に語りかけた、ひとつの等式である。

入選

私の家の水

「私の家の水はとてもおいしい。」

今まで何とも思わなかったことに、ふと気づいてしまった。買ってきただ水でもなく、高級な浄水器があるわけでもない。普通の水道水なのに。何故だろう。そのきっかけは、夏休みの日帰り旅行で帰りに寄ったレストランの水を飲んだときのことだった。今まで水は無味・無臭で何の味もしないものだと思っていた。しかし、コップに出された水は鼻では分らないが、口の中で臭いを感じ、ザラザラした舌触りがのどの手前でまるで一時停止したようだった。常温だったからだろうか。でもレストランの水だ。私だけが変わるのかと思ひ、同じ水を飲んでいた父へ率直に聞いてみた。父は「家に帰って比べてみよう。」と言った。

家に帰って、すぐに水道水を飲んでみると、本当に美味しいと感じた。ごくごくと流れるようにのどへ入っていく。自分の味覚が変でなかったことを確信した。その様子を見ていた父が私を裏庭へ連れて行き、外の水道の脇を指した。

「今、ここは水道になっているけど、以前は井戸があったんだ。その証拠がこの空気穴で、今はほとんど見なくなったけど、昔はこの家にもあったんだろうな。特にこの辺りは水が豊富だったみたいだから、もしかしたら他とは違う特別な水なのかもしれないな。」と言った。でも、私が飲んだのは井戸水ではなく水道の水だ。川越のプールで泳いだ時も気がついた。都内のプールの水とはどこか違っていた。水が自然に冷たく、でも泳いでいる間は、肌を撫でる水が冷たくて心地良い。プールなのに水の中の景色は、遠くまで見通すことが出来そうだ。都内のプールは濁っているわけでも、汚いわけでもないが、遠くまでよく見えない。水特有の優しい、なめらかな肌触りもまるで感じない。水が生き生きとしてはいなかった。

夏休みも終わりに近づいた頃、母が受水場見学会の案内を見つけてき

埼玉県 川越市立初雁中学校 三年 中村 日向子

た。ここで私は答えを見つけることができた。案内してくれた職員の方の説明では、「普通、上水は周辺の河川から、川越の場合は荒川水系と入間川水系から引いてきます。でも、朝夕の時間によつては地下水からくみ上げた水も使います。」と言うではないか。私は帰ってきた父にこのことを教えた。

「でも、どこから地下水をくみ上げるのだろうね。」という私に父は、「知らなかったのかい。家のすぐ近くに浄水場があるんだよ。」と言った。だから朝、顔を洗う時の水が飲みたくなくなるほど冷たく、学校から帰ってきた時の水が染み渡るように美味しかったのだ。すぐ近くのプールの水が他と違って心地よいのも地下水なら納得できる。

父に教えてもらった話では、昔から井戸には水神様を祭り、水を健康の源として井戸をととても大事にしていたという。川越は神社やお寺も多く、きつと水の神様として井戸や川などの水辺をととても大切にする風習があったのだろう。

世界中にはきれいな水がなく濁った、汚い水しか飲むことの出来ない人たちもたくさんいる。ヨーロッパには水よりもお酒の方が安い地域も珍しくないそうだ。

日本では当たり前のように水道から水がでる。それだけで世界中からみればすごいことなのに、川越の水はさらに美味しい。その水の大切さを昔の人たちは、誰に言われるまでもなく知っていたのではないだろうか。私の住む川越の水の美味しさはとても貴重だ。私たちはこれからもずっと大事にされてきた川越の水を受け継いで、「ペットボトルの水に負けない貴重な美味しい水だよ。」と未来の川越に自信をもって渡したいと思う。

入選

「奥秩父もみじ湖」

『雷電十々六木橋』

私は毎朝この橋を見上げてから学校へ行きます。皆さんがよく知っている荒川源流にある滝沢ダムの「ループ橋」の本名です。ところで、滝沢ダムにも別の名前があります。「奥秩父もみじ湖」といいます。この名前にちなんでダムの周辺や国道一四〇号線沿いにもみじをたくさん植えました。

植樹会では、地区の人たちや秩父市役所の人たちが集まりました。私は、お母さんと弟と、家からスコップを持って参加しました。植えた場所は、私の家のすぐ近くの「滝沢ダム下流広場」からダムまでの道沿いです。五メートル間かくに植樹しました。「下流広場」でもみじをいただき、弟と一緒に広場と川に降りる道のところに植えました。私が穴を掘って、弟がもみじを持っていて二人で協力しながら植えました。もみじは、すぐ倒れるので竹で倒れないように支えました。そして、板に自分の名前を書いてできあがりです。その日は、晴れていて、さわやかな風も吹いていて、植えた後はとてもすがすがしい気持ちになりました。

私たちが植えたもみじはすくすく育っています。私は、そのもみじを見るたびにはやく大きくなればいいなとも思っています。私はあまり滝沢ダムのことを知らないのですが、お父さんに教えてもらおうと思いました。

お父さんに滝沢ダムのことを聞いたら、「高さが百三十二メートルの重力式コンクリートダムだよ。荒川水系では二瀬ダムより流域面積は小さくて、浦山ダムより堤高は低いけど、ダムの規模としては埼玉県最大だよ。」と教えてくれました。

埼玉県 秩父市立大滝中学校 二年 木村 有沙

「もともと、秩父市大滝はたくさん種類のもみじが自生している場所なんだよ。だから奥秩父もみじ湖と命名されたんだよ。」

などと書いていました。

私も調べてみました。

ダムの目的には、「洪水調節」と「水道・農業用水」と「発電」があります。滝沢ダムは、百年に一度起こるかもしれない洪水の規模を考えて造られました。荒川が流れる埼玉県と東京都に大洪水が起こらないようにするためにダムを造ったのです。大雨が降った時に「放流調節」をして荒川の下流域に洪水の被害が起こらないようにしています。

二つ目の目的は、荒川の水を水道水や農業用水として使うことです。

大雨のときに滝沢ダムに貯められた水は雨の少ない時に放水されます。埼玉県と東京都の水道水や農業用水として「計画放水」されます。夏に人口の多い場所で水不足にならないようにしているのです。

三つ目の目的は「発電」です。ダムからの放流水を利用して発電します。平成十一年の三月十一日の東日本大震災のあとは水力発電がクリーンエネルギーとして見直されました。

私の家の近くにある滝沢ダムのことを調べてみて、滝沢ダムは埼玉で一番大きいダムだったんだなとわかりました。滝沢ダムにたまに行つてダムの上から下を見たりすると、高くてすごいなと思いました。

それ以上に驚いたのは、滝沢ダムの水が埼玉県や東京都のたくさんの方の生活を支えているということ。水を大切に使うってほしいと思いました。私も大切に使います。

秋には紅葉した「奥秩父もみじ湖」に来てください。

入選

「あなたを支える水」

「節水」と言われても、具体的に何をしたらいいのか分からない。自分が節水しても、あまり意味がない。こんなことを思った経験はありませんか。

現代の私たちは何不自由なく水を使用することができます。水が充分に使用できれば、生活がとて豊かになります。しかし、水がこの地球上から一滴もなくなってしまうたら、私達の生活はどうなるのでしょうか。当然食べ物もなくなり、人間は生きていられなくなるでしょう。そんなことをいわれても、水がなくなってみないと分からない。それではもう遅いのです。なくなる前に、まずは水の大切さを知ることから始めてみましょう。

水は命の源泉。人間は一日たりとも水なしでは生きていけません。昔から、日本人と水とのかかわりは深く、現代へと影響しています。どのようにかかわっているのか、三つの例を挙げて紹介します。

一つ目は稲作です。朝鮮半島から日本に水田稲作の技術が渡ったのは縄文時代だといわれています。弥生時代初期には水をひく技術が発達していなかったため、水田は川などに近い直接水を使える場所につくられました。その後、板やくい水田を区切るあぜや水路がつくられるようになると、遠くの川からも水をひくことができるようになりました。稲作は川とともに発展し、現在、私たちはおいしいお米を食べることができようになったのです。

二つ目は飲み水です。大昔、飲み水を得るためには川などから直接すくうしか方法はなかったため、人々は水辺に住んでいました。弥生時代になると、地面を掘って地下水を利用するようになりました。奈良時代には井戸掘りの技術が伝わり、川から離れたところでも水が使えるようになりました。昔の人々は飲み水を求めて、さまざまな技術で生活を豊かにしようと取り組みました。現在気軽に使用できる水道の水も、水を

埼玉県 八潮市立八條中学校 三年 早津 孝恵

飲むことは生きることだと考えた人々の知恵と技術があったからのことです。

三つ目は、水は現在の産業を支えるエネルギーであり、最近になって注目されている、水力発電です。水力発電の中でも、マイクロ水力発電は装置が小さく、わずかに毎秒0.2リットルの水量があれば発電できます。環境を破壊しない水力発電は、これからさらに活用されていくでしょう。

稲作、飲み水、エネルギーは、水が豊富に存在する日本だからこそできることなのです。そして、私達は水という資源があるからこそ、生活を豊かにしていくことができるのです。水が使えなくなったときの自分の生活を想像してみると、生活していくうえで、水はどんなに重要な資源なのか、気づくはずですよ。

以上の理由から「水」は大切なのです。ですが、毎年耳にする「水不足」。使用できる水は無限にある資源ではありません。ですから、「節水」が必要なのです。どんな小さなことも、続けていくことで効果が表れます。例えば、シャワーの水を使い過ぎない、蛇口の水をすぐ止めるなど、どれも簡単にできるものばかりです。自分だけがそんなことをしても意味がないと思つて節水をあきらめるのではなく、ささいなことを習慣にしていけば、それが普通の生活となり、いずれ節水をしていることが当たり前になるでしょう。あなたが行動すれば、あなたの家族も節水をすすめるきっかけとなります。ですから、節水に興味がないはずはないのです。水の豊かさというのは、大量に使用することではなく、人々が必要な量を最大限に生かすことだと思います。私も、これからもっと節水を意識して生活していきたいと思つています。あなたも、人間、動物、地球の未来を守るために、第一歩を踏み出してみませんか。

入選

人間らしい暮らしと水

神奈川県 洗足学園中学校 一年 仁科 満泉子

東日本大震災のあの日、小学校に迎えに来た母は、「家の中すごいことになってるから」と告げた。マンションの十四階にある私の家は同じ地域でも揺れが大きかったらしい。玄関を開けてまず目に入ったのは倒れた下駄箱や散乱した靴。足をけがするからとスリッパをはき台所に入ると、食器棚から飛び出した十数枚の皿やコップが無残に割れていた。とりあえず破片だけを片付けると、帰ってから手も洗っていないことに気付いた。

蛇口をひねると水が出ない。水道もガスも電気も止まっている。いつもなら手を洗ってお湯をわかし、お茶を飲みながら母と話すほっとする時間なのに。日も落ちてその日はペットボトルのお茶を飲み、食欲もなかったので、おやつのだーナツが夕食のかわりになった。父は出張中、都内に通学する姉は学校に泊まることになり、母と二人、余震も怖かったので、リビングでコートを着たまま休むことにした。寝る前に懐中電灯を持ってトイレに行く流れないことに気付く。幸い浴そうにあつたお湯を使って流したが、いつもあたりまえに出来ていたことが出来なくなつたことで、不向きよりも、不安や心細さが地震の怖さをより一層強くしたのを、今でもはつきり覚えていいる。翌日には全て復旧したが、もちろん被災地の人達はずっと大変な思いを長い間されたことだろう。あとで仙台に住む親戚に聞いたところ「お風呂に入れなかったのが一番こたえた」と言っていた。

髪も体も何日も洗えない、汚れた服を変えることも出来ない。避難所では、共同のトイレで、排泄物も簡単に流せないだろう。身体だけでなく精神にもどれだけのストレスがかかるかと思う。

生命を維持するのに必要な飲料としての水だけでなく、人間らしい最低限の生活をするために、水がいかに大切かということだ。

日本に住む私達は普段、水は蛇口をひねれば際限なく出てくるものだ

と知っている。もちろんその水はきれいで安全な水だ。

世界では十億人以上の人達が安全な飲み水を手に入れることができず、単純な下痢性の病気で毎日四千人、毎年百八十万人も命を落とすというのを調べて知った。

また開発途上国では、生活に必要な水を得るために、水汲みというとても重い重労働を女性や子供が、家族のために毎日何時間もかけて行っているということがわかった。

もし水道施設が整備され、女性や子供達は水汲みから解放され、仕事や学校に行くことができ、女性の社会進出や子供の教育水準を大きく向上させることができる。

まさに水は人間が健康で文化的な生活を送るために真っ先に必要なものなのだと思う。

日本は安全で豊富な水資源を守るために、水質汚染の対策や、気候変動に伴う治水対策に加え、大地震に備えた上下水道の対策や水の備蓄も行わなくてはならない。

そして自分達の国だけ良ければいいというのではなく、途上国が十分に安全な水を得られるよう支援し、技術や資金を提供することも国際社会における日本の重要な役割だと思う。

そして私達ができることは、水を汚さない、無駄に使わないといったあたりまえの事はもちろん、水の足りない社会に住む人たちに心をとめ、できる事をする事だ。

例えば、あるペットボトルの水を買おうと、その売上の一部がユニセフに寄付され、水プロジェクトという、子供たちが清潔で安全な水にアクセスできるように支援する活動を後押しすることができる。

できるだけ早く世界の水環境が改善され、誰もが健康で文化的な生活を送れるようになればいいと思う。

入選

水と在る風景

新潟県 上越市立柿崎中学校 三年 廣田 花椰

「また、泥だらけ——。」と母。

幼い頃を思い出す母の一言。私はよく、家の近くにある用水路で、友達とどじょうやザリガニを捕まえて遊んだ。

「そっちにザリガニ行ったよ。」

「えっ、本当？」

「あっ、泥の中にもぐった！」

「中まで掘ってみようか。」

「そうだね。あとで、手は洗えばいいもんね。この用水路で。」

結局、手も足も服も泥だらけにして。日が暮れるまで、ずっと遊んだ。

久しぶりに、用水路の脇の道を通ってみた。コンクリートの用水路へと変わっていた。立派だった。縁をのぞいてみる。昔のように、どじょうやザリガニの姿は見えない。少し、寂しい気がした。

遠田のかはづ天に聞ゆる——。二年生の時に習った短歌を思い出す。夜、耳を澄ますとカエルの鳴き声が聞こえてくる。いっしんに鳴いている。田んぼのカエル。水が生み出した命。そう、水は命を生み出してくれているのだ。私たち人間は、水に触れない日などない。水を口にしない日などない。だからこそ今、私がいて、みんながいる。ありがたい。私たちの日々の暮らしは、水と在る。水と在る風景。

しかし、何といても心に残る水の風景は、亡き父との思い出。小学校一年生のときから、野球をしている私。私が住む柿崎区には名水百選にも選ばれた大出口泉水がある。そこによく、私は父と二人、水をくみに行った。その水で作った麦茶は、とてもおいしいのだ。暑い中での練習、水分補給は欠かせない。練習にはいつも、この麦茶を持参した。

女子野球の新潟選抜の選手に選ばれた。この時も、練習の合間にはこの麦茶のどをうるおした。ふるさと柿崎の、きれいな水で作った麦茶。体にしみ通り、いつもより力が出るような気がしたものだ。疲れて

いても、一口ふくむと元気が出た。だから、私はいつも母に、「スポーツドリンクじゃなくて、あの麦茶にしてね。」

と頼んでいる。なぜだろう。それは、水とともにある思い出。水をくみに行く道すがら、父と交わした何気ない会話。父の横顔。父の声が、よみがえるから。

ある日の社会科の授業。アフリカ州について学んでいた。アフリカの国々では、私よりずっと幼い子どもが何時間もかけて水くみに行き、それを生活用の水として使っているということだった。

写真をのぞくと、日本の川と比較にならない程に汚れた真っ茶色の水。そんな水で生活せざるを得ない人々。心が、ぎゅっとしめつけられる思いだった。逆に、彼らに対して何もできない無力な自分に腹立たしさを覚えた。

幸い日本では、水道の蛇口をひねれば、きれいな水が出てくる。むしろ、水がでてきて当たり前。だから、水を出しっ放しにしても大丈夫。別にいいや、と気にしなくなってしまう。しかし、それは違う。地球上で、水は自由に使えるのが当たり前、と考えているのは、わずかに過ぎない。現に、アフリカの子どもたちは、学校に行くよりも、水くみを優先する生活が当たり前だという事実を学んだばかりである。水を大切にこそがけなければならない。

祖父は言う。

「きれいな水が流れてくるから、おいしいお米ができるんだよ。」

私のふるさとには、柿崎ダムがある。そのダムから流れてくる豊富な水が川へ、そして、祖父が作っている田んぼをうるおす。

私たちは、水と共存している。水に感謝し、水を大切に使い、水と在る風景を未来へ。それが、私たち若い世代にたくされた使命だと私は学んだ。

入選

海斗ダム（ミニダム）稼動中

静岡県 富士宮市立富士宮第一中学校 三年 小野 海斗

雨が降ると憂鬱だった。去年の夏までは。大好きな部活「サッカー」が出来ないからだ。

去年の夏休みの自由研究「水」、読書感想文「タマゾン川」多摩川でのいのちを考える、学校での総合学習は「潤井川」について友人五人と一緒に調べた。

去年は水に関係するものばかりだった。

水について調べようと思ったきっかけは、本好きの弟が図書館から借りてきた本を、何気なくパラパラッとめくって見たときだった。

一日にどれくらいの水があったら生活できるか？アフリカのガンビア共和国の一人一日あたりの生活用水使用量は、ペットボトル三本の水四・五リットルで、日本人は、三百二十リットルで、ペットボトル二百三本分と書いてあった。日本人の一日の生活用水使用量は、ガンビア共和国の人の約七十日分に相当する。驚いた。サッカーから帰ってくるたびにシャワーを浴び、スポーツウォーターをガブガブ飲む。僕は、水の大量消費者だったのだ。

図書館に行き、水に関する本を数冊借り、新聞の切り抜き、富士宮市のホームページから上下水道、家の検針表から使用量・料金算出方法などをファイル一冊にまとめた。

地球は水の惑星と言われているが、人間が使える淡水は、地球のすべての水の量を、ペットボトル一・五リットルとすると、目薬数滴分ではない。その数滴で六十七億人の人達が生活している。国際河川は、世界で二百六十三本あり、世界人口の約四十パーセントがこの流域で暮らしている。歌でも有名なドナウ川は、十九カ国をまたいでいる。

マレーシアから水を輸入してきたシンガポールは、海水淡水化と下水の再利用（ニューウォーター）として飲料水にしている。

食料品を輸入に頼っている日本は「水赤字国」。僕の大好きなハンバー

ガー一個は、仮想水（バーチャルウォーター）約千リットルの水を使用して作られている。日本が水の豊富な国ではないことが分かった。

昨年は、伊豆では豪雨で約八億円の被害額になった。一方、天竜川、大井川水系では渇水で節水対策が強化された。

市のホームページで調べると水道水のおいしい水ランキング三十二市の中に入っている。

水の大切さが分かってきた。美味しい水を飲み水以外に多く使用しているのはもったいないと思った。

僕は、雨水を有効利用できないかと思った。

祖父の応援を得て雨樋から二百リットルくらいのタンクに屋根からの雨水を貯めて植木の水やりに使おうと思った。蛇口も取り付け、このタンクを「ミニダム」と名付けた。

雨が降るのが待ち遠しかった。コチョココタンクに貯まる雨水を、何度かふたを開けて確認した。草花の大好きな祖母からは絶賛された。

大雨の時は雨水がタンクからあふれてしまい、数個のバケツを用意して蓄えた。

夕食時に、タンク一杯にたまったよとか、もうからっぽだから早く雨降らないかなどと話題になる。雨もまた楽しいという気分になる。

夏には、あと一基「ミニダム」を増設しようと計画 중이다。

課題図書で読んだ「タマゾン川」からは、川の生態系を変えてはいけないことを学んだ。

「遠水近渴を救わず」ということわざを「遠水近渴を救う」に言い換えられるように、海斗蛙も大海を見つめる努力をしていきたい。

入選

「命を支える水」

三重県 皇學館中学校 一年 角 綾華

私の大好きな食べ物、それは「ご飯」です。毎朝、おばあちゃんが料理してくれた味噌汁と炊きたてのご飯を食べると、体からパワーがあふれます。

小学校の時、お米を育てました。田植えや稲刈りをしたり、米作りを教えて下さった農家の方から、米作りの苦労や大変さ、喜びなどについてのお話を聞かせてもらったりしました。その中で印象に残っているのは、米作りには、「水」が欠かせないということです。四月の田植え〜収穫するまでの水の管理によつて、お米の生育や美味しさが決まるということでした。

ところで、私の住んでいる沼木地区は田んぼが広がっている地域です。しかし、昔は水が足りずとれるお米も少なく、苦しい生活を送っていたそうです。今のようない豊かな新田が広がる地域になったのは、人々の苦労があったからです。

江戸時代のはじめ、大庄屋であった米山さんが、お米がたくさんとれる豊かな村にしたいと考え、谷川から水を引くことを計画しました。そして、7年という長い年月をかけ、村の人たちと協力して、5.5kmもの長い用水路を完成させたのです。その結果、たくさんのお米がとれるようになり、村は豊かになったそうです。

私は、小学4年生の頃、米山さんがつくった用水路を歩いたことがあります。水の取り入れ口から田んぼがひろがる「米山新田」まで歩き、その距離が大変長いことに驚きました。また、トンネルもあり、昔の人の知恵と苦労を感じました。

今、私が米山新田で収穫される美味しいお米を食べることができること、そして、美味しい水田の風景が広がる豊かな地域で暮らすことができるのは、昔の人の知恵と苦労のおかげだと思います。

米作りの勉強を通して、水に対する考えも深めることができました。

それまでの私は、蛇口をひねれば水が出ること、のどがかわいた時にはいつでも水が飲めること、トイレのボタンをおせば水が流れること、毎日風呂呂に入れることが普通のことだと考えていました。しかし、水が使いたい時に使うことができることは、本当に幸せなんだということを改めて感じる事ができたのです。

先日、テレビを見ていたら、水道設備が整っていない国を特集していました。そこで暮らす人々は、汚い水や泥水を飲んでいました。汚い水で生活しているために、病気になる人がたくさんいるということでした。また、子どもたちが、片道1〜2時間かけて川へ水くみに行っていました。

私は、この番組を見て、自分がどれほど幸せなのかということ強く感じさせてもらいました。

これから私たちは、「水」に対する考え方を「いつでも、限りなくあるもの」ではなく「感謝」の気持ちを持つようにしなくてはいけないと思います。そのため私は、次のようなことをしていきます。

自分がむだづかいをしないようにするだけでなく、家族にも水の大切さを伝えていきます。そして、友人や近所の人にも、その考えを広めていきたいです。

限りがある、大切な水。昔の人が苦労して守ってきた水、これらのことを伝えていくことで、私たちが住む「水の惑星」を守り続けることができると思います。

入選

水と生きる

水をできるだけ汚さない努力とは何でしょうか。最近、「水質汚濁」という言葉をよく耳にします。川も、湖も、そしてあの広大な海でさえも汚れてきているといいます。その原因について少し考えてみたいと思います。

そもそも「水質汚濁」とは何なのか。辞典で調べてみると「工場廃水・家庭排水などが川や湖、海などへ流入し、その水質が変わり、人の生活や農・漁業に有害な影響をおよぼすこと。」と表記されていました。原因として書かれている、工場廃水・家庭排水はともにヒトによって出されるものであるため、やはり水質汚濁の原因イコールヒトと言うことができると思います。知らないうちに私たちにとつて、生き物にとつて、なくてはならない大切な水を汚してしまっていると思うと少し怖くなります。私はそんな水質汚濁による自然への影響を肌で感じた体験があります。

毎年、私は夏休みになると祖父の家の近くの川へめだか取りに行っています。その川には、もちろんめだかだけでなく、ザリガニやドロンコなどの他の生き物も住んでいて、とても平和な川です。しかし、そんな平和な川がヒトによって汚されています。一つはゴミです。空き缶、ビン、タバコ、ビニール袋、油やソースが付いたままのコンビニの弁当の空箱：数えるときりがないほどのゴミがいつ行っても浮いています。また、そのゴミの量は減ることなく、年々増えていつているように感じます。もう一つは洗剤と思われる白い泡。隅の方に泡がたまっているということがよくあります。そんなヒトが作りあげた最悪な環境の中を、文句一つ言わずにめだかたちはいつも泳いでいます。ゴミを捨てる前に、下水道を通さず泡を流してしまう前に、少しでもめだかたちの視点になって考えてくれる人がもっとたくさんいたならば、その川の間もここまで悪くはならなかったと思います。このような環境を、私たちが生活

滋賀県 守山市立守山中学校 三年 澤井 成美

している地上に置きかえて考えると、道路のいたるところに誰が落としかかからない汚いゴミが散乱し、空気は工場のけむりなどでいつも黒っぽくかすんでいる、というようにとても今の私たちには堪えられないような環境であります。そんな環境の中で生きているこのめだかたちを救うには、一体どうすれば良いのでしょうか。

私はまず「知る」ことが大切だと思います。近くに川や湖、海があるならば一度そこへ足を運び、自然の今を知るので。何かをしようと思っても、まずどんな状況なのかを自分の目で見て確かめなくては始まりません。そして次に、今までの自分の生活や行動を振り返り、直すべきこと、今の自分でできることを「考える」ことです。例えば私は髪を洗うときにシャンプーを出しすぎてしまうことがたまにあるため、シャンプーは二プッシュまでなど、自分なりの決まりを決めてみようと思います。最後にその決めたことを「実行する」ことです。たとえ自分の考えたことができることがとても小さなことだったとしても、みんながやれば大きなことです。「自分一人がやっても意味がない。」と思うのではなく、「誰かがやっているから、自分もやろう。」と思えたら、それはそこに住む生き物たちにとって、その川にとって、水にとつて大きな一歩に繋がるのではないかと私は思います。

この体験を通し、水が汚れてきている背景には私たちヒトがいるということが改めてよく分かりました。このような状況の川は、きつと他にもたくさんあるでしょう。水が汚れると一番困るのは私たち生き物です。現に困っている生き物もいれば、水を汚さないよう努力している生き物もいるかもしれません。私たちヒトはどうでしょうか。今一度考え直し、きれいな水に戻すことができたときこそ、水と生きることができたといえるのではないのでしょうか。

入選

ゲリラ豪雨による浸水対策と環境安全

京都府 龍谷大学付属平安中学校 一年 横山 寧々

私たちの街では近年、梅雨時季になるとゲリラ豪雨と呼ばれている短時間に集中した雨が降り、土地の低い地域では浸水被害が発生している。ゲリラ豪雨は夏の夕立が更に強くなりパワーアップした雨が突然に降る。そして瞬間に家の前の溝や水路は溢れ出し、道路が川のような状況となる。このような現象はどうして起こるようになったのか父と母に相談すると、このような雨の降り方は昔はなかったと聞いた。しかし、最近になって気付くことは、春や秋など私たちはとってとても過ごしやすい時期が短くなり暑い夏や寒い冬が長くなる等、四季を感じられる期間の長さが変わってきたのではないかとのことだ。いろいろ調べてみると世界でも年々北極や南極の水が溶け出し、生態系にも影響が出ているらしく、地球規模で温暖化が進んでいることがわかった。又、最近の気象ニュースでは一時間に百ミリを超える雨が年々増加しているということも分かってきた。地球の温暖化と雨の降り方が急激に変わってきたことは、なにか関係があるのだろうか。

私が卒業した、小学校は丘陵地にある学校でグラウンドには、学校敷地内に降った雨水がたまる仕組みが作られている。先生からは近年のゲリラ豪雨の発生で下流の地域では浸水被害が発生しているとのことでその対策として宇治市役所がグラウンドに一時的に水を溜めて下流域への負担を軽減する雨水流出抑制施設を造ったことを教えてもらった。私の住む街は通っていた小学校と同じく丘陵地にある。そこで今、地域の人達を中心になって私が通っていた小学校のように雨水流出抑制対策の取り組みを行っている。雨水流出抑制対策の取り組みはいつたどのような取り組みなのか、それは誰にでもできるとも簡単な取り組みだ。家の周りにバケツ等を置いて少しでも雨水を溜めること。また、家の屋根から流れてくる水を溜める雨水タンクを設置することなどだ。近くの公民館に「雨ダム」と書いた、雨水タンクが設置してある。この前、父と

その雨水タンクを見に行った。ちょうど雨の降ったあとだったので、タンクの中には雨水がたくさん溜まっていた。丘陵地に住む人が協力して、この雨水タンクを設置すると、ゲリラ豪雨等が発生しても一気に下流域に水が流れなくなるので下流の人たちにとっては浸水被害の軽減に、役立つのではないかと私は思う。そして、その取り組みは広がれば広がるほど、効果が増えていくのではないだろうか。それともう一つ、溜まった水は家庭の花への水やりや、夏の暑いときに道路に撒くうち水にも利用できると思う。人間は水なしでは生きられない。だから水は大変貴重なものだが水害になるほどの大雨は必要ではないのだ。

気象変動は、これからも続きゲリラ豪雨も年々激化していくと言われている。みんなが力を合わせて、各家庭などで雨水流出抑制の取り組みを行っていくことは、浸水被害軽減への防災活動であり、また限りある資源、水の有効利用にも繋がる大変すばらしいことだと私は思う。課題としては、雨水タンクの設置費だと思う。行政が、その設置費用を負担し、地域みんなが力を合わせて、雨水タンクを設置することで、ゲリラ豪雨対策と水環境の有効活用が図れるなど、一石二鳥の効果が期待できると私は考えており、これからの地球にとってその取り組みを進めていく必要があると思う。

入選

水と暮らす

私の住んでいる山田町には、「布目川」という川が流れています。また、山田はその名前の通り田んぼが多く、田植えの時期には布目川から水を引いて田んぼへ利用します。地域の農家の人は皆、この川と共に生活をしています。

私は小学生の頃、この布目川で行われた川の生き物を探す行事に参加したことがあります。そこでは、サワガニやヤゴ、川エビや小さな魚など、たくさん生き物が見つかりました。生き物の中には、「指標生物」というその生き物がいた土地の見当をつけることができる物があります。サワガニやエビがいるということは、布目川がきれいだという証拠です。そのため私は、山田の水はきれいだからよかった、と安心してしまっていました。しかし、それは私が布目川の美しい部分しか見ていなかったからかもしれません。

ある日、布目川沿いを通学中、川の端の方にゴミが引つ掛かっているのが目に入りました。よく見ると、それはあちらこちらにあります。布目川は美しい川だと思っていたのにとっても残念でした。川を汚しているのは自然ではなく、人間です。だから、人間がどうにかする必要があると思います。

また、祖母からこんな話を聞きました。

「昔はな、水は全部井戸から汲み上げてんで。泥が井戸にたまって掃除もしなあかんかったから大変やったわ。だから今よりもっと水を大切にしてくんねどな。」

祖母の話の聞くと、確かにそういう不便な環境だと水を大切にしないといけないと意識付けられるなと思いました。実際、私も井戸の泥を掃除する作業を手伝って、一回一回バケツに泥を入れては出しているの繰り返しで、その大変さを実感しました。ですが、その大変な掃除のおかげで井戸の水はきれいなままで、今でもその井戸水を使い続けることができます。

奈良県 天理市立福住中学校 三年 宮浦りん

ています。

一方、山から直接引いている水の方は泥水になってしまっています。祖母は、「前はここからもきれいな水が出てんだけど、もう誰も掃除しに行かへんようになってしまったからなあ。」

「前はこの水がきれいだったので、自然の水をきれいに保とうと思ったら人の手が必要なのでは感じさせられました。」

これは、井戸や山の水だけにいえることではなく、どんな自然にもいえることです。自然を汚してしまうのは人間ですが、きれいにすることが出来るのも人間です。自分がポイ捨てをしない、地域のクリーン作戦に参加する、どんなことでもいいので自然の美しさを保つ手助けをしてください。

私たちは普段、水があるから、水に助けられて生活をしているのです。そんな水を自分たちが汚しているなんておかしいとは思いませんか。だから、水をきれいにする、水をきれいに保つ努力を私たちがしないといけないと思います。

私はいつも、多くの川の水、山の水と共に生活をしています。毎日お風呂に入ることが出来る、きれいな水を飲むことが出来る、それはたくさんさんの自然のおかげなんだと今、感じています。これからもそんな自然、水と共に生活をしていくには、きれいにしようと思う人間の力が必要です。

私たちが普段からそれを感じて、意識していくことによって、水とお互いにもっと過ごしやすいより良い暮らしをしていけるのではないのでしょうか。

入選

八幡川の水

広島県 広島大学附属中学校 一年 石井 夢乃

私の住む地域には八幡川という川がある。

広島県の二級河川であるこの川の downstream には「みずとりの浜公園」という公園があり、川のすぐそばに位置している。その名の通り、四季折々にたくさん野鳥が飛来する。カモやシギ、カモメなどを川辺に見るたびに、きれいな川を守りたいという気持ちになる。

私が小学生の時、「八幡川クリーン大作戦」と名付けられた、学校のみんなの手で川の水をきれいにしようという取り組みがあった。私は今でもその時のことを覚えている。

川の生物の観察とゴミ拾いのために、私たちは八幡川に降り立った。水面が光にキラキラと反射してとてもきれいだった。シャリシャリと音を立てて歩く砂の上に、いくつもの水の流が見え、小さなカニが砂の穴から顔を出したり、せせらぎのなかにシャコを発見したり、巻貝が少しずつ移動する様子を目にして、無数の命がここで育まれていることを感じた。

また、あるときは川の浄化のために「IC玉レンガ」を作ったこともある。これは、鉄や炭、火山灰などを練って団子にして焼いたもので、水中でゆっくりと溶けながらヘドロの沈下や水の浄化を行うものだ。自分たちが作ったお団子が水をきれいにしてくれるのだと思うととても嬉しかった。水がきれいになれば、そこにたくさん生き物が生息する。私たちはIC玉レンガを八幡川に投げ込みながら、まるで命を生み出すお手伝いをしたかのような気持ちになった。

今、毎日おだやかに流れているこの八幡川も、私が生まれるずっと以前には台風によって氾濫し、広い範囲に水没などの被害をもたらしたことがあったそうだ。

その後この地域は人口が増えたため、洪水調節や水道用水、水力発電などを目的として、昭和五十六年に魚切ダムが建設されたらしい。川の

河口から十一キロメートル上流にあるダムにみんなが訪れたとき、その大きさに驚いた。そして、ここで人間が生きていくための大切な資源が守られているのだと思った。

以前、祖母から「二十年くらい前に、雨が降らなくて水道の給水制限があったんだよ。」と聞いたことがある。調べてみると、平成六年に日本の各地では春から夏にかけての降水量が少なく、真夏は猛暑で水不足となったようだ。そのため、断水になった地域もあったらしい。

この地域でも、祖母が言うように生活用水の給水制限はあったが、魚切ダムのおかげで農地の水が枯れることはなかったようだ。きっと、川が干上がり生物たちが死に追い込まれることもなかったのではないかと思う。

下流に住む私たちは川が流れていることを当たり前のように感じているが、上流で降水量の多いときに水をためて、川の水量が少ないときに水を流すという役割を担ってくれていることは、私たち人間の生活を安定させてくれるだけでなく、川の生態系を守ってくれている一面もあると感じた。

私たちの国は降水量が多く、雨水を蓄える働きをする森林面積も広い。水が豊富だと言われている。でも、いつでも安心して水を使用できるのは世界でも限られた国だけで、水不足に苦しんでいる国は多く、水は限りある資源だということを忘れてはならない。

私たちが大切にしている八幡川の一滴も、とても貴重な地球の資源なのだと思う。命を育む水を守るために、私たちは自分たちにできることをしなくてはならない。すべての生物は水なくしては生きていけないのだから。

水鳥を呼び、川に住む生き物たちの命がたくさん生まれる美しいこの川の水を、いつまでも守っていききたいと思う。

入選

川からの住人

三月、昨日までカラッポだった用水路に、溢れんばかりの水が流れていた。「もうすぐ田植えたー」それから一週間。窓から見える田んぼは、マス目が揃った碁盤のようだ。私は自分の部屋から眺めるこの景色が大好きだ。

何年か前から始められた「圃場整備」によって、田んぼの水引きが楽になったという話を聞いたことがある。それまでは、水引きが深夜になることもあったらしい。

「次の日、仕事がある若いモンはつらいわなあ。わしらも年いくばあつらいけんなあ」

近所のおじいちゃんが言ったことを思い出す。

我が家には水槽で飼いはじめて一年が来ようとしている用水路からの住人がいる。弟が夏休みに友達と仕掛けを作り、捕まえてきた。大人の親指くらいの太さで体長は十五センチぐらいのウナギだ。毎朝、エサをやるのは私の役目。家族で旅行に行くときもどうしても「うなちゃん」が気になる。もう今ではかけがえのない家族の一員だ。

私たちが暮らす那賀川町は一級河川「那賀川」の最下流域に位置し、那賀町で源を發した水たちが、長い旅の後、海にたどり着く「川としては終点」の場所だ。多くの川と海、水に恵まれた環境は生まれた時から「あたり前」になっている。弟達が「うなちゃん」を捕まえた川は、兩岸に草が生い茂り、ザバザバ入るとすぐに濁って何も見えなくなってしまうような場所だ。しかし、そんな川は、最近どんどん少なくなってきたような気がする。

二〇一四年四月十六日付けの徳島新聞に「ウナギ漁獲量、護岸進むと減」という大きな見出しがあった。護岸工事をした割合が高い河川や湖沼ほど、ニホンウナギの漁獲量の減少が激しいとの解析結果をまとめたものだった。記事によると、漁獲量は一九六〇年以降、ほぼ全ての漁場

徳島県 阿南市立那賀川中学校 二年 廣瀬 萌瑚

で減少傾向にあり、護岸率が高いほど減り方が著しいとのことだった。十八河川中、護岸率が六十一%と最も高かった熊本県の球磨川は漁獲量の減少率が毎年平均十四・七%と最も激しく、本県の吉野川は護岸率十六%、減少率は年七・四%という内容だった。夕食時に話題に出すと「そういうえば最近ウナギは高いなあ。」と話す母に「稚魚が捕れんらしいよ。」と父が教えてくれた。もちろんウナギの漁獲量の減少は地球温暖化の影響等もあり、河川環境の要因だけが原因ではないだろうと思う。しかし、「水辺の自然環境を再生すれば、ウナギの生息を回復させることができるとも思えない」といった記事の内容を読んで、豊かな生態系を維持するための可能性を私なりに考えてみた。

現在、那賀川でも護岸工事が進んでいる。「那賀川水系河川整備計画」では基本理念の一つに「河川環境に配慮し、環境に恵まれた川づくり」があげられている。水引きが楽になったように、川を整備することによって私たちの暮らしは安全で便利なものになる。国土交通省から發刊された「FLOW2013」によると全国でも稀な急流河川である那賀川の洪水や濁水などから私達の命と生活を守るために河川整備は必要不可欠なものだということも理解できる。しかし、その一方で、水路や身近に住む生き物たちはその居場所を失っていく。

夏休みの弟たちは、「おじいちゃんの知恵袋」百パーセントの毎日を送った。川での魚の捕り方、ウナギの仕掛けの方法。身近な川が何より楽しい「思い出の場所」になったに違いない。

「環境保護」と「安全」、どちらも大事だと思う。利便性だけを追い求めず、どちらか一方に偏らず、バランスを大切にしながら「これからの川や水環境」について真剣に向き合っていきたい。まず、私にできることとして「ミチゲーション」や「モニタリング調査」などに積極的に参加していくことから最初の一步を踏み出したい、そう決意している。

入選

水のありがたさ

香川県 宇多津町立宇多津中学校 二年 藤田 佑菜

「あー、つかれた。」

シャトルランの後の休けいで飲むお茶は最高だ。滝のように流れた汗をタオルでふきながら、のどの渴きをうるおす。

私は中学校でバスケット部に入り、お茶をいっぱい飲むようになった。毎朝、母がわかして冷やしてくれた麦茶を、1Lの水筒と500mlのペットボトル2本に入れて持っていく。自分の体が水分を必要とし、満たされることで生きていることを実感できるようになった。

人間の体の6割、乳児では8割が水分からできている。今年の夏は猛暑で熱中症で体調をくずす人がたくさんいるそうだ。それほど人間にとって水は必要不可欠なものである。

人間だけではない。生物全体が水の恵みを受けている。この地球上に水があったからこそ生命が誕生し、今の豊かな自然ができたのである。

しかし、地球温暖化や砂漠化、異常気象など水不足で苦しんでいる地域がある。人間が出した排ガスや森林ばっ採で地球の自然が壊されていることも関係している。飲み水を遠くまで歩き求めてやっと得られる国もあるという。日本は蛇口をひねればすぐ水が出てくるがもし、ある日突然水が出なくなったら…考えただけでもぞっとする。

今から20年前、香川で大潟水があった。雨が降らず四国の水がめ早明浦ダムが0%になった。時間給水になり、昼間や夜間は本当に蛇口から水が出ないし、出ても茶色の水が出たりすることがあったと母から聞いた。小さい子供のいる家庭では本当に困ったのだと思う。あたりまえに使っている水だけでも、本当はとても貴重でありがたいものなんだと思った。

校外学習で、早明浦ダムに行って水資源の勉強をした。ダムはとて大きく、満水ではないといっていたが水がたくさんあり、びっくりした。そこでカヌーを体験し、水のおかげでとても楽しい思い出になった。

香川県は雨の少ない地域でため池を作り、水不足に備えてきた。早明浦ダムができたことにより、安定した水を香川に与えてくれるようになった。それでも雨が少ない年は貯水率の心配をしている。私はふつうに思っているがダムの貯水率が新聞にのっているのはめずらしいようだ。

また、香川用水記念公園に行く機会があり、資料館に立ち寄った。そこで昔の人々が水を竜神として大切にあげていたり、いろいろ苦労したため池を作ったことが分かった。香川の人にとって水は特別な存在でその気持ちを受けつぎたいと思った。また四国四県が助け合っていることもすばらしいことだと思った。

水は農業にもとても大切なもので、水の恵みによって「食べ物をつくる」「国土を守る」「生き物を育む」ことができ、豊かな自然を守っていかれることも学んだ。

香川用水記念公園ではイベントで小さい子供たちが公園内の池で魚とりをしていた。とてもうれしそうで、私がかヌーで楽しかったことを思い出した。

今年雨は雨が少なく、また早明浦ダムの貯水率が下がってきている。このまま雨が降らなければ貯水率が0%になり、蛇口から水が出なくなるかもしれない。水を大切にしてきた香川。私もそんな県民の一人として、水のむだ使いをしないようにしたい。

入選

過去を生かした水の使い方

僕たちが住む日本は、豊かな水資源に恵まれている。その根拠としてあげられるのは、どの家庭にも供給されている水道水である。生活用水として使用されるだけでなく、多くの人々がその水道水を飲み水として利用している。このことは、日本の水が清潔でかつ安全だということの象徴だ。僕はいつも水道水を飲んでいますが、味は悪くない。蛇口をひねれば、いつでも好きなだけ、当たり前前に新鮮な水を手に入れることができる。

僕の家庭では、僕が物心ついた頃からとにかく水の使い方に関心がある。朝の洗面からトイレ、風呂、犬の世話にいたるまで、「節水、節水」と目を光らせているので、僕も知らず知らずのうちに水の使い方に対してはうるさくなつたと思う。その理由としてあげられるのが、「平成の大渇水」だ。両親が結婚した年、平成六年は、記録的猛暑に加えて、春先からの少雨が続き、石手川ダムの水位は低下の一途をたどった。七月二十六日から夜間断水が始まり、翌八月一日からは午後一時から午後九時までの八時間給水、そして八月末には五時間給水となつてしまった。当時、姉を妊娠中だった母は、ひどいつわりと猛暑に苦しみ、給水時間に家事を終えるのに苦労したという。その経験から今ではさまざまな節水への取り組みが続いている。一例として、風呂水の再利用や節水こまの取り付け、シャワーヘッドの付けかえなどがあるが、やはり蛇口を必要以上に開かず、水を細く出すことが一番効果的だと思う。この「平成の大渇水」の原因として考えられるのは、地球温暖化による異常気象、干ばつの影響を受けたものだが、僕はもう一つ原因があると考えた。それは人々の「無関心」だ。四国地方は少雨傾向にある年が多く、水がめであるダムの水位は毎日の新聞に載せられている。住民一人一人が日頃から節水を意識し工夫して水を使っていたら、と悔やまれる。水はいつでも永久に絶えることのないものではないのだ。考えなしに浪費してい

愛媛県 松山市立内宮中学校 二年 齋藤 太一

ると、必ず尽きてしまう。しかし、生まれた時から水を豊富に使うことがあたり前のようになっていく僕たちの中では、この危機感が足りない。節水をよびかけるポスターを書いたり標語を作っても、いまひとつ現実味に欠ける。どこか他人事のような思いがぬぐえない。こうしているうちに、また「無関心」な人間が増えていく。

僕の姉はアメリカとインドネシアを訪れたことがあるが、帰国後にこんな話をしてくれた。現地では、決して水道水を飲んではいけない。水洗いした野菜や果物を加熱することなしに口に入れてはいけない。そして僕が一番驚いたのは、ペットボトルの水で歯をみがくということだ。滞在したホテルの洗面所にはミネラルウォーターのペットボトルが置いてあるが、それは飲むためではなく、口をゆすぐためのものなのだそう。日本に暮らす僕たちからするととても信じられない事だが、それが真実らしい。

我が国は世界一の安全な水が自由に使えるすばらしい国だ。それは決してあたり前ではなく、水を管理する一流のテクノロジーのおかげであることは言うまでもないが、それ以前に限られた水を大切に使うという心構えの上に成り立っていると思う。幸せに育った僕らはもっと広い世界に目を向け、地球という星に生きる全ての人々の現状を知らなければならぬ。水道のない国、浄水技術の低い国などにもっと興味をもち、関心を持ち続けることが今後の僕らに求められる。その第一歩が、水を大切に使う節水だ。今僕が触れている蛇口が、世界中の水問題解消へとつながっているのだ。そう思うと、蛇口を閉める指先に力が入る。

入選

水と生きる

愛媛県 愛媛大学教育学部附属中学校 三年 山中 真由

“節水……水を節約すること、無駄に使わないこと”

この言葉と出会ったのは、小学三年生の時だった。父の転勤に伴って四歳まで徳島で過ごし、小学二年生まで東京で生活した。徳島県では、家の近所に吉野川が流れていた。毎日、土手を散歩したり、父の休みの日には釣りをしたり、夏には泳いだり……と、私は豊かな水の恵みを感じながら楽しく過ごすことができた。しかし、母は大雨や台風の時など自然災害に対する不安を感じることもあったと話してくれた。父が報道の仕事をしているため不在で、危険な時は幼かった私を連れていつ、どこへ、どのルートを通って避難すべきか、または生活必需品を供えて自宅に待機すべきかなど、台風が近づくたびに考えながら生活していたそう。

東京では自然と関わる機会は少なかったけれど、大都市と水の関わりを学ぶことができた。例えば、ゲリラ豪雨の時などは地下鉄が最寄り駅だったため、雨水が急に増えて浸水すると危険なので、状況を見極めて瞬時に判断する必要があることを知った。

松山での生活が始まってから、水が私達の生活とより密接な関係があることを実感した。四月に田植えの準備が始まると、農家の人は田おこしをし、溝を清掃し、田に水をはっていく。稲を生育するため、水量を調節し秋の収穫まで“節水”しながら水を大切に使い守っていく姿を折にふれて見てきた。私が転校した年の夏は、梅雨時期に雨が少なかったためプールの授業も中止になった。このような機会は初めてだったので驚いたけれども、節水の大切さ、水のありがたさについて考えるきっかけになった。この頃から、節水を呼びかける市の広報車の活動や日々のニュースにも興味を持つようになった。家庭でも学校でもこまめに水をとめる様に心掛けるようになり、私も自分出来る節水に取り組んでいる。祖父母や両親に尋ねると、我が家でもエコのためだけではなく、

節水対策としてもお風呂の水を洗濯に利用したり、庭の水まきに使ったりしていた。

松山市では平成六年に、夏の異常少雨に伴って渇水となり、水圧が下げられるだけでなく、時間断水が行われ、生活に多大な影響が出たそうだ。祖父は当時フェリーに乗船していたため、他県の同僚が松山の渇水を知り、不便だろうと湧き水を持ってきてくれたりしたそうだ。祖母と母は、水が利用できる時間に家事を済ませ、必要な水を溜めて断水時に家族みんなが使える様にすることが毎日大変でけんしょう炎になったこともあると話してくれた。父は一人暮らしをしていて、断水時間が決められているため仕事をしながらお風呂の時間を調整するのに苦労したらしく、生活に密接な関係のある温水取材はとてよく覚えていると言っていた。私が利用している美容院の店長さんも、水を使う仕事なのでお客様に迷惑をかけないようにしたいけれども、使える水が限られているため満足のいく仕事ができずとても辛かったと教えてくれた。

水は、私達の生活に欠かすことのできない大切な資源であり、電気、ガスと共に重要なライフラインの一つだ。私達は水がなければ生きていくことはできない。松山での生活を通して、私は水の大切さ、自由に水を利用することが出来ることへのありがたさを痛感した。近年、異常気象により自然環境は日々大きく変化している。私達はその状況を正しく読み取る必要があると思う。私は水の恵みに感謝し、水への備えを忘れることなく変化を続ける環境にも柔軟に適応する力をしっかりと身につけてこれからも水と共に生きていきたい。

入選

ふるさとの味

私にとって『ふるさとの味』とは、『筑後川の水の味』だと思う。最近まで『ふるさとの味』は、『母親の手料理の味』『真心の味』というイメージしか浮かばなかった。しかし、家族との出来事を通して『ふるさとの味』は、水ではないかと思うようになった。

私の住んでいる久留米市には、筑後川という大きな川が流れている。筑後川は、熊本県の阿蘇からつながっていて、その水は、水道水として私達の元へとやってくる。それ以外にも、筑後川の水は農業用水にも使われていて、米や野菜を作るのにとっても大切な水だ。私達にとって、筑後川の水は必要不可欠なものだ。

その身近な水道水にも、それぞれ『味』があると気づいたのが、去年の夏だった。帰省先の東京で、売られていた東京の水道水を母が買回家族皆で飲んだのだ。

「東京の水は、もつとおいしいよ。水道の蛇口から直接飲む水と味が違う。」

と、母が言った。私は、この言葉に同意することが出来なかった。この水も、同じ味だと思っていたからだ。しかし、北海道、東京、山梨、久留米の水を飲み比べた時、私の考えは変わった。水は水でも、それぞれ全然味が違うことが分かったのである。しかも、母が言ったように、水道の蛇口から飲む水と、売られている水の味も少し違っていた。

そして、飲み比べてみて、「おいしい。」と感じたのは、久留米の水、筑後川の水だった。いつも私達を支えてくれている、筑後川の『水の味』は、とても優しい味がした。

私は、この『水の味』を守りたいと思う。私達を支えてくれる筑後川、この川の水が枯れてしまうと、私達は生活ができなくなる。植物も育たず、実もつけない。多くの生き物たちが、命をおとしてしまう。つまり、私達は筑後川の水と共に生きている。否、生かされているのだ。だから、

福岡県 久留米市立屏水中学校 二年 今村 麗紀杏

私は筑後川に恩返しをしたい。その筑後川の『水の味』を変わらないものになりたい。そのために、私に出来ることは何だろう。

一つは、水は汚さないこと。しかし、私達は、朝起きてから寝るまでに、顔を洗ったり、食器を洗ったり、多くの水を使っている、生活するだけで水を汚している。だから、水をできるだけ汚さないという考えを持って、使った食器は洗う前に油汚れなどはふき取ったり、洗剤やシンナーなども適量を使うなどしていくことが大切だ。

他には、水を大切にすること。毎日の生活の中で、シャワーなどは、出さずばなしにせぬにこまめに止めて、水を使いすぎないようにする。そして、水源の涵養に役立っている山の自然や田んぼなども共に大切に保全していくことも、水を守ることにつながると思う。

北海道の川には、産卵のために生まれ育った川に戻ってくるサケがいる。そのサケも生まれ育った川の『水の味』を忘れられないのかもしれない。きっと私もサケのように、筑後川の『水の味』を忘れないだろう。

私は今でも水を飲む度、ご飯を食べる度、筑後川の『優しい水の味』を感じている。

私に出来ることは、すごく小さなことかもしれない。それでもあきらめずに、筑後川の水を守り、『ふるさとの味』を伝えていこうと思う。それが、今私に出来る、筑後川への精いっぱい恩返しだ。

入選

ギニアワーム

佐賀県 学校法人松尾学園弘学館中学校 三年 熊谷 澤

「ギニアワーム撲滅へ」祖母から渡された新聞の切り抜きにはそう書いてあった。そこには、ミジンコを含んだ川の水を人間が飲みミジンコの体内に潜んでいたギニアワームが人の腹部で成長してしまふ。足が痛くなり、患部を水に浸す。すると足の皮膚を食い破って成虫が何百万匹という幼虫と一緒に水中へ放出されて、ギニアワームが広がるという感染サイクルの説明が書いてあった。

ミジンコは極めて小さな水生生物だと思うが、透明な容器に入れば目で確認できる。「ミジンコが泳いでいるのも知らないで水を飲んでしまふなんて」と不思議に思った。しかし、一九八〇年にWHOが撲滅を目標に掲げたときには、三五〇万人の患者がいたというから驚きだ。

新聞の説明を読んだ私が、ギニアワームを撲滅するのが簡単だと思うのは、新聞の説明がわかりやすくそこに住む人々の暮らしを知らないからだろうと思う。でも、ミジンコ入りの水を飲まなければ感染しないことがわかっていて、三十年も撲滅できないなんて、WHOの活動はなんと時間がかかるのだろうと少し納得のいかない感情を覚えた。気になって調べてみると、南スーダンでは政治的な武力衝突が、またマリではクーデターの影響が活動の妨げになっていることがわかった。命の危険が伴う地域で水や食べ物を確保するのは大変だろう。ミジンコ入りの水を飲まざるを得ない環境が少し垣間見えた。

記事の中に、ガーナで実際に活動された方の「最初に濁った池の水をそのまま飲んでいる現場を見て衝撃的だった」という言葉が出てくる。昔の日本でも、濁った池の水を飲んだらどうか。米を作り、田畑を耕した私たちの祖先は、水をどう扱ってきたのだろうか。時代劇などで見るように、雨水や川の水を甕に溜め、極力水を使わないように工夫したのだろう。水を甕に溜めて利用していたのなら、砂などの異物は底に沈殿し、透明な水を得ることができるだろう。そして、井戸を利用するようにな

り井戸が生活の中に根付き、地下水を利用していく。自然にろ過された水を得ることができれば、ギニアワームのような寄生虫に悩まされることはないはずだ。日本の井戸技術や給水施設が世界で注目を浴びる理由がわかる気がした。昔の人の知恵が、未だに世界に通用することが誇らしく思える。

ギニアワームの一番恐ろしい所は治療薬や予防ワクチンはなく、何度でも繰り返し感染することだ。たとえ給水施設や井戸があってもポンプが故障して修理ができなかったり、ポンプの電気代が払えなかったりすると、放置されてしまふケースが少なくない。そうなると、村人はまた池の水に頼らざるを得なくなる。そこでWHOは村人たちから水道料金を集め、自分たちだけで施設を維持・管理できる経営システムを積極的に導入したという。

私が生まれてからずっと、水に対して不便なことはない。それが当たり前だと思っていた。遥か昔の十六世紀の半ばには上水道ができ、その後日本の水道システムが高度な処理技術を確立する。今私たちの生活に欠かせない水道は日本中どこにいても利用でき、飲料水がどの蛇口からも出る。遠い異国のギニアワームという寄生虫の話を読んだことで、水道の、大腸菌や寄生虫の心配のない飲料水がどの蛇口からも出るということの、凄さを知った。日本のその誇れる技術で、飲み水に困ることなく生活できる人が一人でも増える事を願いたい。そしてギニアワームが撲滅できる日が一日でも早く来るように祈らずにいられない。

入選

蛇口からミネラルウォーター？

熊本県 熊本大学教育学部附属中学校 一年 梅田 萌

私は、小学校五年生の時に熊本に引っ越してきました。市役所へ転入手続きに行った際に、市役所の前の石垣から水が涼しげに流れているのを目にしました。そこには、「城見の水」との看板があり、水飲み場がありました。水飲み場には、「蛇口をひねれば天然のミネラルウォーター」と書いてありました。

水飲み場の水もミネラルウォーターが出るようになっていて、なんて、熊本ってすごいなあとその時は思いました。

転校初日、私は前の学校でそうしていたように、のどが渴いた時のために水筒を持って学校へ行きました。休み時間、水筒を出した私に、クラスの友達が、

「水筒はいらんよ。みんなのどが渴いたら、水道の水を飲むよ。」

と教えてくれました。廊下に出ると、みんなが水道の蛇口から水をがぶがぶ飲んでいました。私が以前住んでいた地域では、なるべく水道から直接水は飲まないように、必ず水筒を持ってくるように言われていたので、とても驚きました。

みんなの真似をして私も飲んでみるととても冷たくて、おいしく、市役所前にある、「蛇口をひねれば天然のミネラルウォーター」という言葉を思い出しました。水飲み場にわざわざミネラルウォーターを入れているのでなく、水道から出てくる水がミネラルウォーターのようにきれいでおいしいという意味だったんだなあ、と実感し、次の日から私も水筒を持って行かなくなりました。

家族で行った、飲料メーカーの工場見学では、きれいで、おいしい地下水が豊富なため熊本に工場が作られたことや、製造されているミネラルウォーターの名前にも「阿蘇」が使われていることを知り、やっぱり、熊本の水は素晴らしいのだなあと感じました。

熊本の水は素晴らしいのだなあと感じました。阿蘇の外輪山に

降った雨が、熊本市に到達するまで、約二十年もの年月がかかるそうです。長い時間をかけ、天然の大地のフィルターを通して、ゆっくりに過される間にミネラルが含まれ、おいしい水になり、私たちのもとに届けられているのです。

この、すばらしい水をこれからもずっと、利用できるようにするため、私たちは、自然環境を守ってゆく努力を続けると共に、節水を心がけることが大切だと思います。

私も、日常生活の中で、歯磨きや手洗いの時に水を流しっぱなしにしない、など、節水についての啓発ポスターをよく見かけます。

ただ、水に不自由なことがなく、いつもきれいな水で生活していると節水の必要性を実感することが難しいとも感じます。

例えば、日本のトイレは、「大」と「小」のレバーがありますが、実際にきちんと使い分けているでしょうか。一回の使用で、大と小の水量の差は、約一リットルだそうです。たった一リットルの差かもしれませんが、みんながきちんと使い分けることによって、大きな節水の効果が得られるのではないのでしょうか。トイレのレバーにそれぞれ実際に使われる水の量を記載して、使うたびに目に入るようにするなどの工夫をするのも、節水を実感できてよいかもしれません。

今回、熊本の水について調べる中で、「くまもと水検定」というご当地検定があることを知りました。私は、この検定にチャレンジし、熊本の水について学び、その魅力や今後の課題について知ること、水を大切にするという意識を高めていきたいと思っています。

いつまでも、「蛇口からミネラルウォーター」が続いていくためには、私達みんなが、水についてよく知り、節水の努力を続けていくことが大切なのだと思います。

入選

水の大切さ

熊本県 熊本市立錦ヶ丘中学校 三年 東礼次郎

水面に反射した光が僕の目を刺激して思わず目を閉じてしまう。キラキラというような間の余裕もなく閃光のような白く突き刺さる発光体である。うごめく発光体を頭の中で整理しながら僕はボートを漕ぎつづけた。いつのころからだろう、自分でボートを漕げるようになったのは。高校生のボート部を尻目にゆつくり、ゆつくり水面を漂う。

小さなころから江津湖で遊んでいた。上江津湖にはたくさんのザリガニがいて、捕って帰っては眺め、えさを与え、いつのまにか死んでしまったのを後悔するやいなやまた江津湖に向かう。僕に惜しげもなく恵みを与えてくれ、においも冷たさも色彩も僕の記憶にはいつもそこがある。久しぶりにボートに乗った日に僕は思った。

「江津湖っていいよな。」

僕が通ったところは上江津湖で、熊本市の南東部にある。国道五七号線の北側にあり、その南側は下江津湖と呼ばれる。

四百年前の江戸時代、加藤清正が熊本市の西南域の水害をくい止めるために江津塘を構築し、湿地帯であったこの湧水地帯が江津湖となったそう。上江津湖の湧水場に素足で入ると夏のどんな暑さもふっ飛んだ。遊びつかれては涼みに行った場所だ。透明な水につけた自分の足を見ると、レンズの効果が足をひとまわり大きく見せる。真上から自分の足のぞいてみては持ち上げてやはり大きくなっていかなかった…と毎回不思議に思った場所だ。

足を入れてしばらくすると体が寒くなるほどだ。少し木陰になっているその湧水場に入ると時間の流れがなくなるのは小さいころと同じだった。ただ水の冷たさに神経が集中し何もかも忘れられる。

このあたりの地名が神水（くわみず）や出水（いずみ）というのにも昔は何も思わなかったが今思うと先人たちの水に対する思いが受け継がれているようにも感じられて、尊い気さえる。

昨年、熊本市は国連の「生命の水（Water for Life）」最優秀賞を受賞したという新聞記事を読んだ。熊本市の水管理の取り組みに対しての賞ということで、僕自身何の貢献もできていないがとても誇らしく思った。僕が生まれるずっと前の先人による治水の取り組みが、受け継がれ、改良され後世への資源とするこのシステムは、世界においても稀にみる環境だそう。

熊本市は阿蘇外輪山の火砕流堆積物や白川中流域の水田涵養による地下水の恩恵を多大に受けている。僕はそんなことも知らずに幼いころからその水とたわむれ水の恵みからなる希少な生物をまのあたりにしてきた。ごくあたりまえにある身近な存在が実はとても価値のあるものだったと実感し、改めてその存在意義をたしかめられたように、この世に今存在するものは全てたくさんの意味を持ち大切にしなければならぬのだ。

僕たちは水に生かされ、水を操り、水を守り、水と共生しながら今を過ごしている。このことを忘れずに、先人たちが守り続けてきたものを後世に受け継ぐことが僕たちの使命である。こまめに節水する。風呂の残り湯を活用するなどといった小さなことを継続して行って、今ある水資源を守り続けていきたい。

入選

祖父母に導かれて

宮崎県 宮崎市立生目台中学校 三年 花岡 知恵香

今年の三月。私達一家は車で宮崎と茨城を往復した。茨城からの帰り道は行きとは違いのんびりとしたものだった。その中で私の役目は、水やジュースをみんなにくみ分けることだった。

「お姉ちゃん、お水ちようだい。」

四歳の末っ子の口からは毎回この言葉がでてきた。弟は水がとても大好きだ。紙コップに水をくんで手わたしてやると、花が咲いたような笑顔になり、

「ありがとう。」

とひとこと言う。そしてゴクン。ゴクン。いつきに飲み干して

「ハア。」

と一息つくと必ず言う。

「おいしかった。」

と。水には人を笑顔にする力もあるんだなあと感じた。

そんな水が今、世界中で不足し始めている。そしてそれに危機感を覚え、水不足をおさえるために一生懸命活動している人々がいる。私の祖父母もその一人だ。

茨城から約十五時間かけて大阪の祖父母の家についた。祖父母は阪神淡路大震災での水不足の体験を通し、節水や水をよごさない取り組みをしている。

朝、起きると歯を磨く、ゆすぐ、歯ブラシを洗う、顔を洗う、残りの水を葉と一緒に飲む、といった五つのことをたった一杯のコップの水で行う。そして家の前にある植物に水をやることから祖父母の節水の日が始まる。今回それを体験した私は、祖父の言ったある言葉が心に残っている。

「人間が自然に与えた影響は必ず自分達に返ってくる。植林することも水をよごさんことも大切や。けどな、おじいちゃんは環境を破壊しない

社会の実現が、自然や水、動物や人間に対してもっと大事なことで思っている。」

私にとつては少し難しい言葉でもあったが、とても重みのある言葉として響いた。

多くの人達が何も考えずに流した生活排水や原発による水質汚染。車の排気ガスや工場の煙などによる地球温暖化。森林減少。それに伴っておこる水不足。アメリカのある大学は、人間が水資源を今のペースで使っていくと、三十年後には水は枯渇し、世界全体の生態系が重大な危機に直面すると報告している。今の私達の生活の一つ一つが未来の私達の生活につながっている。

昨年から私達家族は、私の呼びかけで節水や水に害を与えないようにする工夫を始めた。食器用洗剤を売っているものではなく、自然から作り出した自然に大きな害をあたえない手作り洗剤を使うなどといった小さなことである。一人一人が小さなことでもいいから行動することで、水不足をくい止めることができると私は思う。

祖父母の家を出発するとき、祖父は私にこう言った。

「節水や水をよごさない取り組みをしている一番の理由は、次の世代の子供達に今よりもっときれいな地球を残したいからやねんで。」

すごいなあと思った。

次の世代の子供達に今よりもっときれいな「水の惑星」である地球を残せるよう、自分にできることは何なのか、考え、これからも実行していきたい。たとえそれが小さなことであっても。私には、祖父母という大先輩がいるのだから。

入選

僕の島の水

鹿児島県 三島村立大里中学校 一年 谷口 海七斗

昨年十二月、僕たちの住む地区で、蛇口から出る水をそのまま飲むことができなくなりました。それは水の浄化施設が故障し、水道水の塩素濃度が基準値より低くなっていることが原因だった。そのため僕たちは、水を必ず一度煮沸させてから、飲むことになった。もちろん学校の水も飲めない。それから施設の故障が直るまでの間、毎日家で煮沸させた水を水筒に入れ、僕たちは学校に通った。

僕たちの生活に欠かせない水。今回のこの経験は、僕にとって普段何気なく使っている水について深く考えるきっかけとなった。

僕は、鹿児島県の三島村黒島という離島に住んでいる。島の人口は二百人足らず、僕の通う学校も、とても小さな学校で全校児童生徒数は十五人、普段はとても穏やかな時間が流れている。そして僕の母は、僕が通う学校で養護教諭として働いている。しかし水が飲めないという連絡があつてから、母は学校の水道水の塩素濃度を測ったり、さまざまなか所と連絡を取り合ったりと、とても忙しく動き回っていた。そんな母を見て、僕は普段何気なく飲んでいる水の大切さを、初めて心から実感した。そして僕は、これまで自分が飲んでいた水が、どのようなルートをとったり、蛇口から出てくるのかを知りたくてたまらなくなりました。僕は早速、父母に尋ねてみることにした。父母は、今まで僕が知らなかった、たくさんのお話を、丁寧に教えてくれた。

まず、この地区の水は、地区の水道管理組合が基本的に自分たちで管理しているということ。そして僕にとつてとても身近な区長さんなどが、普段僕の知らないところで、地区のみんなが安心しておいしい水を飲むように働いていること。また、蛇口から出る水は、山の高いところの湧き水を集め、麓まで何個もの浄化施設を通過し、ろ過沈殿を繰り返して、薬を入れた後の水であるということなど、どれも僕が初めて聞くことばかりだった。また使ったあとの水は、そのまま海に流すのではなく、各

家庭に浄化槽が取り付けられていて、浄化槽の中に薬品や微生物を入れることで、水をきれいにし、海に流しているということも知った。

僕は、これまで普段何気なく水を使い、そして何も考えずに水を捨てていた。もし僕が住んでいるところが都会の大きな街なら、このような水の循環を教えてもらっても、なかなか実感がわかない部分もあるのだろう。しかし、人口も少ないこの島で、僕がよく知っている人たちが水に関わり、そして環境に配慮して海へと水を返しているという事実。この事実は、僕にとつてとても身近なこととして捉えることができた。そして僕のこれまでの水に対する安易な考えや行動を反省させた。

僕は以前、島のお年寄りから水道ができる前は、川の水を使って料理や洗濯をしていたという話を聞いたことがある。当時は川の上流の水は料理用に、下流の水は洗濯用にと、みんながルールを守って川の水を使っていたそうだ。当時の人たちは、他に水を使う人たちのことも考え、きつと今よりも何倍も何倍も大切に水を扱っていたことだろう。しかし、それから生活も少しずつ豊かで便利なものとなり、安心して飲める水が蛇口から出ることも当然のこととなっていった。それに伴い、水の大切さや水に関わる人たちの顔を考えることも減っていったのだと僕は思う。そして何かトラブルが起きたときにだけ、改めて思い出し、考え、再び時の経過とともに忘れ去っていく。まさに「のど元過ぎれば熱さを忘れる」だ。これではいけないと僕は思う。

島に高校がないため、僕は中学を卒業したら島を離れる。しかしこれから先、どんなところで生活しようと、島の水から学んだことを忘れず、普段何気なくあるもの大切さやそれに関わる人の顔を考え、これから僕は行動していきたい。

入選

祖父の言葉から

みなさんは、人間が生きていくために大切なものは何だと思えますか。いろいろある中で、私は水だと思います。なぜ私がそう思ったかという
と先日、あるテレビ番組を見たからです。

そこにはアフリカの子供達の姿が映し出されていました。遠く離れた川まで水を汲みに行く幼い子供達。でも、やっとたどり着いて得る水は、汚れたように濁っていて、とても飲み水とは言えないようなものでした。私にとって水は、“水道の蛇口をひねるといつでも出てきて、当然そのまま飲めるもの”です。しかし、このような国は、世界でわずか十数ヶ国しかないのだそうです。現在のように、私達が安心して飲めているのは日本の浄化などの技術が発達し、飲めない水を飲める水へ変えていったからなのです。

それでは、私の住む地域は、昔いつたいたのようにして水を得ていたのだろうか疑問に思い、祖父に尋ねてみました。すると、祖父は机の引き出しの奥から一枚の紙を大切そうに取り出し、私に見せてくれました。それは、「祝溜池竣工」という溜池が作られたことが書かれているものでした。祖父が幼かった時のこと。私の住む鈴木段という所は、水に恵まれていない地域だったそうです。人口は二百五十人あまりで、辺りは田んぼもありましたが水が少なく、稲作に向かない土地で、飲料水でさえも不自由していました。大人も子供も家から離れた井戸へ歩いて水を汲みに行っていました。それは、日々の重労働です。そして、普段は仲のよい集落の人達でも暑さの厳しいときには、飲料水や使用水を我先にと水の取り合いになることも多かったそうです。そこで昭和九年に溜池を作ろうと人々は設計調査を行ったのですが、費用の負担に堪えられなくなり中止となりました。しかし、どうしても必要だという人々の強い思いによって、政府の補助を受け昭和十年の五月に溜池が完成し、人々はたくさんのお水を得ることができたそうです。この溜池は今も私の住む

鹿児島県 阿久根市立大川中学校 三年 尻無 遥香

鈴木段にあり、昔の人々の思いを込めた記念碑も建てられました。

私はこの文章を読んでいると、とても胸が痛みました。私達が普段、当たり前のように飲んでいる水も、昔の人々はこんなにも苦勞をして水を得ていたのかと考えると、もっと大事にしていくべきだと強く思ったからです。

「昔はこの辺も水が少なかったで、火事になったら、集落は全部焼けたつど。遥香にとって、水はいつでも飲めて当たり前のようなものかもしれないけど、おいたちからすると、わっぜ大切な物やったいよ。じゃつで、粗末にせんよう、大切に使わんといかんたつど。」

祖父の静かな、けれども力強い言葉が、私の胸に深くしみました。

「水」それは私達にとって必要不可欠の存在であり、飲料水、洗濯、トイレなどといった様々なところで使われるものです。幸い私達は水の恵まれた環境で生きています。しかし、現在世界の約七億人が水不足の状況で生活しているといわれています。私は、シャワーや水道の出っぱなしをしないことや洗濯の時にはお風呂の残り湯を使うなど、ちょっとした心がけで無駄な水を十分に減らせると思います。だから、自分ができる節水に心がけていきたいです。

水は限りある貴重な資源です。今を生きる私達も、その先を生きる人々も、誰が必要とするのは水です。私達が生きるためにも、未来のためにも、大切に使わなければいけません。私達に水がなければ今はない、水があるから今があります。だから、これからは未来のためにも一滴一滴の水に感謝し、大事にしていくべきだと私は思います。

入選

水と生活の関わり

鹿児島県 奄美市立赤木名中学校 三年 福田 桃香

「水の出しっぱなしは、もったいないよ。」

私は、小さい頃から祖母によくこう言われていました。その頃の私は、「面倒くさいなあ。水くらい、いいじゃん。」という気持ちで聞いていました。それは、水はいろいろなところにあるし、私が水で困ることは、一度もなかったからです。

奄美大島は、海がきれいで、緑が多い所。私が住んでいる笠利町平も、サトウキビに囲まれた緑豊かな地域です。そんな奄美大島は、昨年、六月二十七日から約五十日間、一度も雨が降りませんでした。

「この頃は、雨が降らないなあ。」と思いつながら、昨年の夏休み、私は、いつものように自転車で部活動に向かっていました。すると、いつもは気にしたことのないサトウキビに目がいききました。水不足で葉が黄色くなっていたのです。また、ロール現象も起こっていました。ロール現象とは、植物が水不足になると、水分の蒸発を抑えるため葉を巻き、自己防衛する現象のことです。サトウキビの他にも、近くの畑の野菜や道端に咲く花も水不足で枯れていました。

家に帰ると私の祖父や祖母は困っていました。理由を聞いてみると、散水車の申し込みをしたのですが、二週間待ちになっていたのでそうです。私の祖父や祖母の他にも、水を求めている人がたくさんいるんだなど分かりました。葉も黄色っぽくなっていて、ロール現象まで起こっているのに、二週間も放っておいたら、サトウキビは枯れてしまっています。だから、祖父は散水車が来るまで毎日、黄色の大きなタンクに自分で川から水を汲んで、水かけを頑張っていました。

そんな姿を見て、私は、少し胸が痛くなりました。私がいつもお風呂で使うシャワー、顔を洗うときに使う水。いつも気にせず、水を出しっぱなしで使っていました。こんなに水で困っている人がいるのに、私は、こんなことをしているのだろうか。そんな気持ちになりました。私は、

私にできる節水はないかと考えてみました。まず、一番水を使っていると思うお風呂。お風呂でのシャワーは出しっぱなしではなく、使うときに水を出して使わないときは水を止めるようにしようと思いました。また、顔を洗うときにも使うときだけ水を出したいと思いました。

そして八月に入り、やっと四十九日ぶりの雨が降りました。祖父、祖母、地域の方々は、「ようやく雨が降ってくれて一安心だねえ。これでサトウキビの夏植えの準備が、できるよ。」と喜んでいました。私も、祖父たちの笑顔を見て、うれしかったです。また、新聞記事では、「キビ以外の農作物にも恵みの雨」という大きな見出しで「今は最も水が必要な時期。雨が降り出したときは、踊りたくなるほどうれしかった。もう少し降ってくれると安心できる。」とキビ以外の農作物を作っている人も喜んでいと書かれていました。

農業をする人たちが渴水で困っている間、雨が降らなくて喜んでいる人もいます。それは観光の仕事をする人たちです。ずっと晴れの天気が続いたので、たくさん仕事ができたとします。人によって仕事も違うので雨のことをどう思うのかは違いますが、みんな誰かのために、生きるために頑張っているのだと、雨のことで知ることができました。

ようやく雨が降るようになった今でも、私は節水を心がけています。雨は自然のことで人間にはどうすることもできないけれど、節水は誰にでもできます。もし、この世の中に水がなくなったらどうなるでしょう。私たちも水不足の植物のようになってしまわないでしょうか。水。それは、私たちの生活に深く関わり、欠かせないもの。今、蛇口をひねれば当たり前のように水が出て使えること、そのことに感謝して、私は、これからも水を大切にしていきたいです。

入選

日本の水のありがたさ

フランス共和国 日仏文化学院パリ日本人学校 三年 保野 永久子

「ひねったらじゃー。これなんでしよう。」

というクイズを友達に出されたことがあります。その時、わざと早口で言われたのでわからなかったのですが、

「(蛇口を) ひねったらジャー。だから正解は水だよ。」

と答えを聞き、

「ああ、そうか！」

と私はその時は何も感じることなく納得していました。しかし、それはあたり前のことではありません。とても恵まれていることなのです。

私は以前、テレビで一日に何回も川に水を汲みに行くアフリカの少女を見たことがあります。なんと、その地には水道というものがありません。村から何キロも離れた川にタンクを持っていき、蓋ぎりぎりまで水を汲み、それを背中に担いでいくのです。途中、岩がむき出しになっている山道を通っても弱音を吐かずにその少女は重いタンクを運んで帰るのですが、頑張つて持つて帰った水はなんと、泥水なのです。私はその時、私たちがあたり前のように思っている、蛇口をひねるだけで水があらふれ出てくる生活のありがたさを感じました。

また、蛇口から水が出てきても、直接飲むことができない水が出てくる国もあります。中国は今、大気汚染よりも水質汚濁の方が深刻な問題になってきている程、きれいな水がなくなっています。川が七色に染まり、この被害は地下水にまで及んでいるそうです。中国の水道水の調査をしたところ、水道水の安全基準を満たした配給地域はわずか五〇%だった、という話をどこかで聞いたことがあります。つまり、半分は汚水が水道水として配水されているということになります。私たちはいつもあたり前のように蛇口からきれいな水が出てくるのを見ています。透明で清潔な水が出てくることにもありがたさを感じます。

さて、みなさんは「硬水」というものを聞いたことがありますか。日

本には軟水が流れていますが私が今住んでいるフランスでは硬水が流れています。硬水とは、カルシウムイオンやマグネシウムイオンが多量に含まれている水のことです。料理や洗濯には向いていません。毎日硬水を使って髪を洗っているのでおかげで私の髪の毛は少し色が落ち、パサパサになってしまいました。飲料水にも向いていない硬水は、飲めないことではないのですが残念ながら美味しいとは言えません。私が日本で部活をしていた頃は、練習が終わった時によく友達と水道水を飲んでいましたが、水道水なのにとっても美味しかったのを覚えています。その体験は日本ではできません。透き通った清潔な水でも、日本のように美味しい水が出てくる蛇口は世界で見ても少ないのではないのでしょうか。

「ひねったらジャー」はとても恵まれていることです。しかし、「ひねったらゴクツ」ができるということはさらに素晴らしいことなのではないのでしょうか。それなのにわざわざ売っている水を買っている人たちがいると思うと、なんでもつたいたいことをしているのだろうと思ってしまう。いつもきれいな水を作り、私たちに運んでくれている浄水場の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

日本のお水、ありがとう！

入選

水について考えたこと

フランス共和国 日仏文化学院パリ日本人学校 一年 山中 侑紀

私たちが使っている水は、雨となって降り、川を流れ、安全できれいな水に生まれ変わった後、蛇口から出てくる。そして、使い終わった水は、下水道に流され、ある程度きれいにされた後に海へ流される。そしてまた、海へかえった水が蒸発し、上空で雲となり雨を降らせる…というように、今、こうしている間にも、地球を循環しているだろう。その水の循環は、目には見えないが、地球を取り巻くとても大きな流れなのではないかと思う。そう思うのは、こんな風に考えたことがあるからである。

パリに引越してきて、数ヶ月が経ったある日、水道水をコップにくんで飲んでみた。「やっぱり、日本の水のほうがおいしい。」そう思った。すると、ある疑問が浮かんだ。「この水は、どこから来たのだろうか？」パリの川といえば、セーヌ川を思い浮かべるが、もしかすると、セーヌ川でもなくて、どこか別の川からきているのかもしれない。それはともかく、その時飲んでいた水は、ここから遠く離れた場所からやってきたにちがいない。さらに、フランスから離れた場所にある地域から雲が運ばれ、フランスに雨を降らせ、その雨（水）が川を下り、私たちのもとへ届く。そのようにして、別の地域や国から水がくることもあるかもしれない。もしそうだとすると、私たちは、もともとフランスに無かった水を飲んだり、使ったりしているときもあるということになる。フランスは、いろいろな国と面しているので、そのようなことも起こりやすいのではないかと思う。また、生活に利用できる水（淡水）は、地球上の水全体の三％程度で、湖や川の水となると、約〇・〇一％ほどしかないという。そのような限られた水を、私たちは口にすることができる。それは、私たちが恵まれた環境にいることも大きく関係しているけれど、やはりそれは、水が地球を循環している、何よりの証拠だと思う。

もう一つ、疑問に思ったことがある。それは、私たちのもとに水が届

けられるまでに、一体どれだけの人がかかわっているのか、ということである。例えば、私が店でペットボトルに入った水を購入したとして、大ざっぱに考えてみると…、川の水をきれいにする工場で働いている人、商品を製造する工場で働いている人、商品のパッケージなどのデザインを考える人、商品を注文し、店に並べる人、トラックなどに商品を積む人、そのトラックを運転する人…、など、たった一本の水の入ったペットボトルを製造するだけでも、こんなにたくさんの方がかかわっている。いくつか例を挙げてみたが、それだけでも、何百という人はいるのではないだろうか。また、水を使うことによつて、必然的に、そのような人たちと「つながり」をもつことになるのではないだろうか。例えて言うならリレーのようなものだと思う。誰かが欠けてしまえば次の人にバトンを渡すことができない。つまり、水とかかわる仕事をしている人すべての働きがあつて、私たちは水を使うことができるのだ。だから、私たちに水を届けてくれた人たちに、感謝の気持ちを忘れてはいけないと思う。

このように、水について考えたことは、大きく一つ、「水はどこから来たのか？」と、「水が届けられるまで、どれだけの人がかかわっているのか？」である。これからも、自分たちが、水に恵まれているということを忘れずに、水を大切に使っていきたい。

入選

あの瞬間を味わうために

オーストラリア連邦 メルボルン日本人学校 二年 北村 祥子

「っあゝ！」

疲れている時に水を飲むと、思わずそう言ってしまうのは、私だけではないと思う。私は小学生の頃、二年と一学期間だけが、陸上部に入り、活動していた。夏休みにも練習があったのだが、汗だくになりながら走った後、水筒の中の水、または麦茶を飲む瞬間は最高であった。カラカラになった喉に水が通る瞬間には、なんとも言えない、解放感があったのだ。

「水、出しすぎ！そんなに出す必要ないでしょ。」

母の手伝いで皿洗いをしていると、父、母さらに双子の姉にまで、こんな風によく怒られる。自分では「そんなに出演しているかな」と思っていたの。だが、他の人と比べてみるとびっくりしてしまった。なんと、家族、特に双子の姉の使う水の量の、倍近い水の量を、私が使っていたことが判明したのだ。私以外の人が、こんなにも水を大切にしていたのかと少し驚き、そしてまた、そのことに対して少しショックを受けた。それと同時に、私ももっと水を大切にしたいほうがいいのかな、と思うようになり始めた。

また、歯みがきをする時にも、同じようなことをたびたび言われる。私には、水を出しすぎる癖があるようだ。

「コップに水をためて、歯ブラシをそこに突っ込んでぬらしたら？」

と、父がアドバイスをくれた。なるほど、確かに父は、毎日この方法で歯みがきをしている。こんなに細かい所まで注意して、水を大切にしているのか、と驚いた。そしてこのアドバイスを聞いてからは、時々忘れてしまうが、この言葉通りに歯みがきをするように、心がけている。しかし、私には不思議に思うことがあった。

「皿洗いにしても、歯みがきにしても、何でこんなに、水に対して気を使うんだらう？水なんかたくさんあるのに。」

そう思った私は、「水」について、インターネットで調べてみた。ある

サイトを見ると私たちが利用できる水は、全体の50%にも満たないこと、現在世界の7億人の人々が、水不足による食糧危機の被害を受けていることなどがわかった。さらに読み進めていくと、水の使用量は先進工業国に多いこと、特に輸入に頼る日本は、他国の水も多く輸入してしまっていることなどが書かれていた。

少ない資源を守るための活動を、自分から起こしたり、参加したりすることは、中学生には難しい。しかし、毎日何気なく行っている行動に「こうしてみようかな」と工夫を加えたり、考えたりすることができたら、水を守る第一歩につながるのではないか。風呂の残り湯を捨てずに、洗濯に使用する、水の出しっぱなしをなくすなど、できることはたくさんある。

「っあゝ！」

そう思えるすばらしい水の、爽快さを守るためにも、私は努力していきたい。まずは、注意された、水の出しすぎ・使いすぎに気をつけ、いっつか、自然とその行動ができるようになったらいいな、と私は思う。そして、世界中の人々が水を大切に、少しでも多くの人々が水に不自由せずに暮らしていければ、と私は考える。

第36回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

- 1 応募要領
- ① テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
 - ② 対象・・・中学生（平成26年度に中学校に在学中の者、または、これらの者と同じ学齢の者を含む）
 - ③ 原稿枚数・・・400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
 - ④ あて先・・・中学校等の所在する都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する者にあつては、国土交通省水管理・国土保全局水資源部
 - ⑤ 応募期間・・・平成26年6月13日（金）までに国土交通省水管理・国土保全局水資源部あて到着分有効
 - ⑥ 著作権等・・・○応募作品は自作の未発表のものに限る
○応募作品の使用権は、主催者に帰属する
○応募作品の返却は行わない

2 審査
 応募作品19,419編のうち、各都道府県の地方審査を経た195編及び海外日本人学校より送付された52編について国土交通省水資源部による内部審査を行い、中央審査会の対象となる45編を選出。平成26年7月9日に開催された中央審査会において、最優秀賞1編、優秀賞8編及び入選36編あわせて45編の入賞作文を決定。

3 表彰 (1) 賞および賞品

賞		賞品
最優秀賞	内閣総理大臣賞	賞状、副賞
優秀賞	厚生労働大臣賞	賞状、副賞
優秀賞	農林水産大臣賞	
優秀賞	国土交通大臣賞	
優秀賞	環境大臣賞	
優秀賞	水の週間実行委員会会長賞	
優秀賞	独立行政法人水資源機構理事長賞	
優秀賞	全日本中学校長会会長賞	
優秀賞	全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞	
入選		賞状、副賞

(2) 表彰式 最優秀賞及び優秀賞の受賞者を平成26年8月1日（金）に砂防会館別館会議室（シェーンバッハサポール）にて開催された「水を考えるつどい」において表彰

4 中央審査委員 (50音順、敬称略)

- 秋本 佳則（内閣官房水循環政策本部事務局審議官）（国土交通省大臣官房審議官）
- 印藤 久喜（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（農林水産省水資源課長）
- 大村 卓（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（環境省水環境課長）
- 上村 寿一（独立行政法人水資源機構理事）
- 須田 淳一（全日本中学校長会編集部部长）
- 須磨 佳津江（フリーアナウンサー）
- 長崎 宏子（スポーツコンサルタント）
- 松明 淳（公益社団法人日本水道協会調査部長）
- 宮崎 正信（内閣官房水循環政策本部事務局参事官）（厚生労働省水道課長）

5 主催者等
 主催：水循環政策本部、国土交通省、都道府県
 後援：文部科学省、厚生労働省、農林水産省、環境省、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構、全日本中学校長会

第36回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿

	都道府県名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
1	北海道	しほや 瀧谷 なゆり 七夕里	はせがわ 長谷川 じゆり 珠莉	○ ひさつね 久恒 しゅう 朱結	—	—
2	青森県	ふくだ 福田 たつや 竜也	わだ 和田 まゆこ 真由子	○ うめだ 梅田 ちえり 千恵梨	おくもと 奥本 れいり 玲依来	やまぐち 山口 えりな 恵梨奈
		やまだ 山田 まさや 匡哉	ふなこし 船越 ももか 桃佳	みやかわ 宮川 ひなこ 日向子	たはた 田畑 ありさ 有梨沙	おくもと 奥本 みずき 瑞生
		みやかわ 宮川 たずく 佑	ひぐち 樋口 ひろき 大樹	やまもと 山本 りゅうや 隆哉	—	—
3	岩手県	○ いよだ 五代 儀 みなつ 光夏	○ くまがい 熊谷 のぞみ 希	○ すずき 鈴木 あや 綾	まるやま 丸山 し 詩乃	—
4	宮城県	○ かつしか 勝然 みなみ	くどう 工藤 みさき 美咲	はしづら 橋浦 ふみか 史郁	—	—
5	秋田県	おおの 大野 めぐみ 恵実	さとう 佐藤 あゆか 歩佳	—	—	—
6	山形県	—	—	—	—	—
7	福島県	えんどう 遠藤 もえみ 萌美	◎ さいう 齋藤 ま お 真緒	ふじさわ 藤澤 ののか 乃々桂	—	—
8	茨城県	○ かとう 加藤 すずか 涼芳	たかせ 高瀬 あいる 愛瑠	いししま 飯島 みさき 鏡紗輝	かしむら 樫村 ゆうか 優花	きむら 木村 もとき 元
		いたくら 板倉 そう 想	きのした 木下 ななみ 七海	こや 谷 萌々加	—	—
9	栃木県	○ なかむら 中村 はな 華	○ ひらき 廣木 みゆ 未唯	よこやま 横山 ゆうな 結羽菜	いのうえ 井上 ひろむ 広夢	かざやま 風山 さあや 彩綾
10	群馬県	○ ながおか 長岡 きょうか 京花	こばやし 小林 みく 未来	しほさき 柴崎 しょう 涉	ふせ 布施 とも 知世	まつさき 松崎 りゅう 美羽
11	埼玉県	みやもと 宮元 ゆみか 優美歌	○ なかむら 中村 ひなこ 日向子	○ きむら 木村 ありさ 有沙	○ はやつ 早津 孝恵	あさうみ 浅海 せりな 芹奈
		もりや 森谷 ゆうか 優花	うえの 上野 さや 紗弥	くじ 久慈 あづき 彩月	かわむら 川村 なみ 奈美	おのづか 小野塚 れな 玲那
		やまなか 山中 かつみ 晴未	かつみ 勝見 ひろき 竜也	みやた 宮田 ほのか 帆乃香	—	—
12	千葉県	かわさき 川崎 みなみ 美波	ほんま 本間 ひなび 美風	はせべ 長谷部 まお 真桜	すなが 須永 なつき 菜月	はたなか 中 彩乃
		うさみ 宇佐美 ちほる 千晴	まどば 的場 はるか 遙香	つばき 樫 彩花	—	—
13	東京都	◎ はん 潘 ようしゅう 庸晶	あんな 安奈 杏奈	◎ おかの 岡野 なな 奈々	◎ やまき 山崎 そら 蒼空	いしわだ 石和田 さくら
		しゅう 周 ぼい 培文	さとう 佐藤 よしひで 慶英	いんじゆ 仁珠 崔	ばば 馬場 みさと 美咲都	—
14	神奈川県	○ にしな 仁科 みづほ 満泉子	おかもと 岡本 ゆうり 悠莉	うめざわ 梅澤 そうし 爽詩	—	—
15	新潟県	○ ひろた 廣田 かや 花椰	たぎざわ 滝澤 はると 陽斗	さわだ 沢田 ひなた	やまもと 山本 つばき 飛翔	—
16	富山県	やながわ 柳川 みゆき 深侑	さつつか さつ美 幸塚	やまだ 山田 さくら 彩羅	—	—
17	石川県	いずも 出雲 たくと 卓斗	—	—	—	—
18	福井県	—	—	—	—	—
19	山梨県	◎ おだいら 小平 しゆり 守莉	—	—	—	—
20	長野県	—	—	—	—	—
21	岐阜県	まつら 松浦 りょうたろう 遼太郎	きもと 木本 さら 彩染	こばやし 小林 なぎさ 渚	たかし 高志 ななみ	—
22	静岡県	☆ かたやま 片山 ゆりか 裕里加	なかむら 中村 けんせい 健生	あきおか 浅岡 なつき	はらだ 原田 もか 萌雅	じぬし 地主 めい 芽生
		○ おの 小野 かいと 海斗	きむら 木村 さやか 沙弥香	—	—	—
23	愛知県	おのうち 尾之内 のりこ 法子	いわかわ 岩川 はるか 晴香	すずき 鈴木 ひなこ 日奈子	—	—
24	三重県	はしもと 橋本 きょうか 京佳	○ すみ 角 あやか 綾華	おとわ 音羽 たくみ 拓実	ふじわら 藤原 あや	ながの 永納 りょうか 綾香
		なかみち 中道 ゆずき 柚希	まえだ 前田 ももか 白香	みやもと 宮本 れん 蓮	みやもと 宮本 たくみ 匠	まつだ 松田 ひなこ 子
25	滋賀県	なかの 中野 かな 花菜	いしはら 石原 れん 蓮	○ さわい 澤井 なるみ 成美	—	—
26	京都府	○ よこやま 横山 寧々	しんたろう 島田 凜太郎	やまもと 山本 ひな	—	—
27	大阪府	よしだ 吉田 なほ 菜々徳	なかみぞ 中溝 しゆり 珠里	まるやま 丸山 えみ 恵美	—	—
28	兵庫県	なるたき 鳴瀧 まゆ 真夕	たかぎ 高木 まゆ 麻由	たつまつ 辰馬 ゆうき 佑紀	こじま 児嶋 しゅんすけ 俊輔	よしお 吉尾 ゆうき 悠輝
29	奈良県	かとう 加藤 こう 皓	おかにし 岡西 さち 紗知	○ おやうら 宮浦 りん	—	—
30	和歌山県	いしかわ 石川 はなえ 英恵	たなか 田中 りか 利佳	さかうえ 坂上 まいか 舞香	—	—
31	鳥取県	—	—	—	—	—
32	島根県	◎ もりやま 森山 あい 愛	おがた 尾形 まお 真桜	—	—	—
33	岡山県	—	—	—	—	—
34	広島県	はたて 旗手 みり 実梨	なかにし 中西 ひなり	○ いしい 石井 ゆめの 夢乃	—	—
35	山口県	わたなべ 渡邊 ひろこ 寛子	—	—	—	—
36	徳島県	まみや 馬宮 こはる 胡春	○ ひろせ 廣瀬 もも 萌瑚	たにぐち 谷口 ひなこ 日菜子	さがわ 佐川 そういちろう 颯一郎	おかもと 岡本 ゆか 有加
		おおくさ 大草 あみ 亜実	やまぐち 山口 みこと 扇世	ひらい 平井 まい	うえた 上田 けいいちろう 慶一郎	—
37	香川県	○ ふじた 藤田 ゆうな 悠菜	わだ 和田 みお 美里	きたに 木谷 ゆうた 裕太	—	—
38	愛媛県	○ さいとう 齋藤 たいち 太一	◎ いまむら 今村 ちはる 千春	○ やまなか 山中 まゆ 真由	しばた 柴田 こころ 想	こんどう 近藤 れい 依
39	高知県	はまだ 濱田 うみ 海未	きしもと 岸本 しゅうや 翔弥	とかい 戸梶 ななみ 七海	—	—
40	福岡県	○ いまむら 今村 りのん 麗紀杏	ほそかわ 細川 なるみ 奈留海	しがき 志垣 ゆう 有羽	いぬどう 犬童 みき 幹	—
41	佐賀県	なかしま 中島 あいみ 愛水	○ くまがい 熊谷 みお 澗	おだ 小田 ひなこ 日奈子	—	—
42	長崎県	むらい 村井 さくら	いりえ 入江 まほ 真穂	うししま 牛島 のりえ 紀瑛	—	—
43	熊本県	○ うめだ 梅田 もえみ 萌	のじり 野尻 みさき 岬	すずたに 鈴谷 みさき 美紀	○ ひがし 東 れいじろう 礼次郎	よしほら 吉原 ももか 百香
		やだ 大田 れい 怜	—	—	—	—
44	大分県	おおいし 大石 きょうな 京奈	ひらき 平木 ありさ 亜里沙	うらまつ 浦松 ななえ 奈々恵	わたなべ 渡辺 りゅうすけ 龍介	—
		これなが 是永 やまと 大和	おおつ 大津 なお 奈央	にした 新田 あつろう 篤朗	かわの 河野 せな 星南	—
45	宮崎県	○ はなおか 花岡 ちえか 知恵香	むぎた 麦田 ゆうき 湧規	しょうむら 庄村 さき 咲希	—	—
46	鹿児島県	○ たにぐち 谷口 みなと 海七斗	○ しりなし 風無 はるか 遥香	さめしま 鮫島 きづな 生綱	○ ふくだ 福田 ももか 桃香	たしろ 田代 さあや 紗彩
		たぬま 田沼 なつみ 三奈	やました 山下 なつみ 夏未	はまばた 濱畑 あすか 明日香	—	—
47	沖縄県	おおしろ 大城 かつた 勝太	◎ おおはら 大濱 あいり 愛里	ひらかわ 平川 あつき 敦暉	—	—
48	海外	○ ほの 保野 とわこ 永久子	○ やまなか 山中 ゆき 侑紀	○ きたむら 北村 しょうこ 祥子	—	—

(注)氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、☆は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選、その他は佳作。

第36回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

都道府県名	地方審査 優秀者数 (編)	応募学校数	応募総数 (編)			
			1年	2年	3年	
北海道	3	4	99	33	25	41
青森県	13	4	152	112	19	21
岩手県	4	7	87	1	67	19
宮城県	3	4	35	22	8	5
秋田県	2	2	2	1	1	0
山形県	0	0	0	0	0	0
福島県	3	8	10	1	5	4
茨城県	8	10	518	191	251	76
栃木県	5	5	482	113	258	111
群馬県	5	6	484	135	187	162
埼玉県	13	5	251	77	85	89
千葉県	8	22	657	278	103	276
東京都	9	7	140	23	115	2
神奈川県	3	12	1,384	348	447	589
新潟県	4	3	45	9	29	7
富山県	3	7	913	360	213	340
石川県	1	1	126	0	0	126
福井県	0	0	0	0	0	0
山梨県	1	1	1	0	1	0
長野県	0	0	0	0	0	0
岐阜県	4	1	4	4	0	0
静岡県	7	7	274	102	83	89
愛知県	3	11	258	119	46	93
三重県	10	5	442	244	144	54
滋賀県	2	4	720	339	141	162
京都府	3	4	478	189	172	117
大阪府	3	8	859	245	495	119
兵庫県	5	9	893	399	397	97
奈良県	3	5	108	30	40	38
和歌山県	3	9	660	193	237	230
鳥取県	0	0	0	0	0	0
島根県	2	2	2	1	1	0
岡山県	0	0	0	0	0	0
広島県	3	3	217	63	52	86
山口県	1	3	5	0	3	2
徳島県	9	4	104	79	13	12
香川県	3	14	96	39	46	11
愛媛県	5	21	408	166	102	140
高知県	3	2	4	0	1	3
福岡県	4	13	859	84	558	217
佐賀県	3	1	88	0	0	88
長崎県	3	7	392	162	163	67
熊本県	6	58	6,459	2,062	2,703	1,694
大分県	8	2	33	25	8	0
宮崎県	3	9	375	115	150	110
鹿児島県	8	8	226	168	13	45
沖縄県	3	10	17	0	9	8
海外	52	3	52	23	15	14
合計	247	331	19,419	6,555	7,406	5,364

※滋賀県：学年不明77名

※広島県：学年不明16名

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

		応募 学校数 (校)	応募 総数 (編)	性別		学年別		
				男 (編)	女 (編)	1年 (編)	2年 (編)	3年 (編)
第1回	昭和54年	634	4,875	1,878	2,997	1,513	1,710	1,652
第2回	昭和55年	486	3,930	1,446	2,484	1,245	1,462	1,223
第3回	昭和56年	487	5,569	2,159	3,410	2,004	1,974	1,591
第4回	昭和57年	512	5,111	1,878	3,233	1,923	1,848	1,340
第5回	昭和58年	495	4,192	1,435	2,757	1,925	1,214	1,053
第6回	昭和59年	531	7,013	2,905	4,108	2,923	2,115	1,975
第7回	昭和60年	572	9,703	3,676	6,027	3,794	3,647	2,262
第8回	昭和61年	507	7,431	3,080	4,351	2,809	2,680	1,942
第9回	昭和62年	513	9,253	3,789	5,464	4,086	2,935	2,232
第10回	昭和63年	498	10,119	4,233	5,886	4,212	3,501	2,406
第11回	平成元年度	641	13,192	5,601	7,591	5,345	4,392	3,455
第12回	平成2年度	551	11,782	5,320	6,462	5,404	3,549	2,829
第13回	平成3年度	623	12,056	4,834	7,222	5,174	3,821	3,061
第14回	平成4年度	552	12,718	5,332	7,386	4,898	4,533	3,287
第15回	平成5年度	473	13,680	5,340	8,340	4,658	5,024	3,998
第16回	平成6年度	557	13,647	5,591	8,056	5,247	4,577	3,823
第17回	平成7年度	558	15,918	6,617	9,301	5,940	5,388	4,590
第18回	平成8年度	491	15,479	6,595	8,884	5,403	5,606	4,470
第19回	平成9年度	456	13,688	5,731	7,957	5,088	4,792	3,808
第20回	平成10年度	493	13,764	5,935	7,829	4,842	4,609	4,313
第21回	平成11年度	429	11,903	4,971	6,932	4,324	4,059	3,520
第22回	平成12年度	413	14,283	6,288	7,995	4,737	4,968	4,578
第23回	平成13年度	362	11,841	5,131	6,710	3,862	3,844	4,135
第24回	平成14年度	413	13,442	6,159	7,283	4,878	4,691	3,873
第25回	平成15年度	453	13,385	5,980	7,405	4,100	4,618	4,667
第26回	平成16年度	452	16,488			5,595	5,655	5,238
第27回	平成17年度	439	15,726			4,489	6,464	4,773
第28回	平成18年度	373	16,038			5,157	5,811	5,070
第29回	平成19年度	385	16,173			5,242	5,697	5,234
第30回	平成20年度	339	14,927			4,516	5,118	5,293
第31回	平成21年度	344	16,462			4,929	6,038	5,495
第32回	平成22年度	378	16,941			5,592	5,925	5,423
第33回	平成23年度	365	19,618			6,930	6,635	6,052
第34回	平成24年度	368	16,826			4,542	6,692	5,591
第35回	平成25年度	368	18,191			5,564	6,602	5,924
第36回	平成26年度	331	19,419			6,555	7,406	5,365
合計		16,842	454,783			159,445	159,600	135,541

- (注) ・第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
 ・第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
 (教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮)
 ・第35回においては学年未記入者101名を、第36回においては学年未記入者93名を学年別集計から除いている。

第36回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

全国からの応募作品19,419編の中から選ばれた最優秀賞1編と優秀賞8編の受賞者の表彰式は、平成26年8月1日（金）に東京都千代田区の砂防会館別館シェーンバッハ・サボアにおいて開催された、「水の日」を記念する政府主催行事「水を考えるつどい」内で実施されました。



最優秀作文の朗読
静岡県 湖西市立白須賀中学校3年 片山 裕里加さん（内閣総理大臣賞受賞者）



作文コンクール受賞者と各賞授与者



国土交通省

Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

国土交通省水管理・国土保全局水資源部

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3

電話 (03) 5253-8111 (代表)

ホームページ

<http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html>